



発行 **東京清陵会** (諏訪清陵高等学校同窓会・東京支部) 会長=藤森宏一 編集 81回生(昭和50年入学)

事務局 〒113-0033 文京区本郷1-10-14 加奈利屋館7F 小林公認会計士事務所 気付 TEL&FAX 03-3812-5887 DTP=スタジオパラム 印刷=中央印刷株式会社

第25号

吾等たたずば世をいかん

～心の中で生き続ける「清陵」とは～

思えば40年前、清陵の入学式の前に出身中学校ごとに構成される“地方会”に招待され、先輩たちから校歌を教わった。楽譜などなく、口伝だ。「入学式までには誦んじておけ!」「はいっ」。

第一校歌が8番、第二校歌が10番まである校歌の歌詞は難解で、お恥ずかしながら、その意味を今なお正確に把握できていない。ところが最近、混沌とした仕事場から出て、酒を飲んでひとり家路に就く深夜の道すがら、ふと校歌の一節が口を突いて出てくる。～ああ博浪の槌とりて、打破せむ腐鼠の奴ばらが、弥生半ばのこの夢を～。

You Tubeに清陵の校歌があるというので、聴いてみた。第一校歌、第二校歌と別々にUPされていた。ピアノの伴奏で肅々と歌っている。あ、ダメだ。手拍子だよ、手拍子。我々の頃は声を張り上げ、叫ぶように歌っていたぞ。さらに、第一校歌の8番も、7番までと同じ調子で歌っているじゃないか。これでは、長

調の第一校歌から短調の第二校歌へ、4拍子から2拍子へ繋げられない。猛然と加速して絶叫し、切れ目なく第二校歌へなだれ込まなくてはいけない。

しかし、清陵の校歌は楽譜のない口伝の校歌であり、楽譜という「規律」がなかったからこそ、状況や時代に即応して工夫と変身を遂げてきた。とすれば、これが現代風なのかもしれない。それを云々するのは、年寄りの郷愁でしかない。

しかも、清陵の校歌は、学校によって制定されたのではなく、学友会歌として生徒自らの手で作られた。そこに自主自立の心意気があった。だからこそ、自分たちで変えてもかまわないのではないか。それこそが「自反而縮雖千萬人吾往矣」の精神であり、「自分の眼で見て、自分の頭で考える」という清陵時代に身につけた習慣なのだと思う。

そんな、我々清陵卒業生の心に生き続ける原点について考えてみたい。

(当番学年幹事・81回生 田中達也)

Contents

特集1

清陵OBの音楽家へインタビュー

- 指揮者 柳澤寿男さん(93回生) 2
マリンピスト 浜まゆみさん(96回生) 6
フォークシンガー 三浦久さん(67回生) 8

特別寄稿

諏訪の文化の中核、諏訪響を支えた

- 清水ヶ丘の友たち 武井勇二 10

特集2

東京清陵会ワーキンググループの活動

- 立ち上げ! 中堅世代 12

- 2014年度新卒歓迎・学生交流会 13

ミドル交流会

- 社会で活躍する先輩の話の聞く会 14

特集3

拝見! 学年会活動

- 東京ザザムシ会(64回生の皆さん) 16

会費改訂ならびに賛助金納入のお願い

- 魅力ある東京清陵会へ 17

- 東京清陵会総会報告 18

- 会計報告 19

- 2013年東京清陵会会務報告

- 年次計画/計報 など 20

2014年度

東京清陵会 第48回定期総会案内

清陵の友に
逢いに行こう!

日時=2014年10月17日(金) 午後5時~8時30分

総会=午後5時~5時50分 懇親会=午後6時~8時30分

(午後4時30分より受付開始)

場所=アルカディア市ヶ谷(私学会館) 4F「飛鳥」・3F「富士」

東京都千代田区九段北4-2-25 ☎03-3261-9921

市ヶ谷駅(JR、東京メトロ有楽町線、南北線、都営新宿線)

下車、徒歩2分

議題① 2013年度会務報告 決算報告 ② 2014年度事業計画/予算案

③ 役員改選 ④ その他

懇親会=会費 8,000円(学生2,000円)

※当番幹事=81回生、次期当番82回生、サブ幹事91回生、101回生

●ご面倒ですが出席、欠席いずれの場合でも同封の返信用はがきにご記入の上、9月26日(金) 必着にてご返送ください。

特集
1

清陵OBの音楽家ヘインタビュー

第1次世界大戦勃発から100年 サラエボで開催した集大成の 「第九平和祈念コンサート」

★柳澤寿男氏(93回生) バルカン室内管弦楽団 音楽監督



「こういう地で演奏会を開くことができたことに大きな意義がある」

音楽に国境はない。音楽を通じて世界平和を——。そんな思い、願いを込めた演奏会「世界平和コンサートへの道～第九平和祈念コンサートinサラエボ」が7月5日(日本時間6日)、ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボで行われた。第1次世界大戦のきっかけとなった「サラエボ事件」(1914年6月28日)から100年の節目の年に、柳澤寿男さん(下諏訪町出身・93回生)が音楽監督を務めるバルカン室内管弦楽団(以下BCO)の演奏で、日本人合唱団50人とサラエボ国立劇場オペラ合唱団50人の総勢100人の大合唱団が世界平和の祈りを込め、ベートーヴェンの「交響曲第9番」を高らかに歌い上げたのだ。会場は、日本からの応援団30人を含む約500人の聴衆で埋まり、大盛況となった。今回の「平和祈念コンサート」に向けての活動は昨年8月から始まっていた。帰国中の柳澤さんに、東京・国分寺でお会いし、その1年間を振り返っていただくと同時に、音楽を通じた世界平和祈念の思い、今後の活動予定、そして後輩の清陵生へのメッセージをうかがった。

新宿の路上演奏会から 始まった

——暑さが続いていた8月上旬、国分寺市内のカフェで向き合った柳澤さんは、帰国後、沖縄にしばらく滞在されていたとのことで、すっかり日焼けして精悍な雰囲気漂う。語り口はソフトで知的である。初対面ではあるが、お互い清陵OBということで、打ち解けるのに時間はかからなかった。

なんとといっても7月の「平和祈念コンサート」について聞かなければならない。読者(清陵OB)の方々に分かりやすいようにと、柳澤さんは1年前の取り組みから話し始めた。

柳澤 まずは、流れからお話しさせていただきます。大前提として2007年にバルカン半島の、とくに旧ユーゴスラビアの民族融和のためのオーケス

トラとして「バルカン室内管弦楽団」をつくりました。

今年2014年は、1914年のサラエボ事件をきっかけに第1次世界大戦が始まってから100年という節目の年にあたります。来年、2015年は日本において終戦70年になります。サラエボ、コソボ、ユーゴというと、(日本の方には)遠いイメージかもしれませんが、歴史はつながっています。第1次世界大戦があったから第2次世界大戦があり、サラエボから広島、長崎、東京へとつながっていくわけです。

今回は、開戦100年、終戦70年という節目に日本とサラエボ、旧ユーゴをつないで平和祈念の第九コンサートをやるというのが趣旨で、「世界平和コンサートへの道」というタイトルのイベントなんです。なぜ、道かというと、去年から今年にかけて1年間、ずっと平和祈念コンサートをいろんな形でやってきたから

です。

——そのスタートは、東京・新宿の路上だった。「新宿モア4番街第九フラッシュモブ」で活動の幕が開いた。

柳澤 2013年8月11日午後5時10分に、新宿・東口のモア4番街という通りで突然、サプライズイベントが始まりました。170人のオーケストラと合唱団が路上に現れ、「第九」のサビだけを演奏、合唱したのです。このイベントがゆくゆくは1年後、2014年7月5日のコンサートにつながっていったのです。

その後は、9月に広島の被爆ピアノを東京に持ってきて演奏会をやったり、今年4月には徳川家広さん(徳川家19代当主)とパロネス・シャルロット・ドゥ・ロスチャイルドさん(ロスチャイルド家の一員でソプラノ声楽家)の対談に小さなコンサートを加えた「徳川家・英国ロスチャイルド家 世紀を超えた 奇跡の対談♪コンサート」をやり、私がモデレーター(司会)を務めました。平和について考える会ですね。

——5月下旬にはBCOの楽団員が来日。日本での公演が続いた。

柳澤 5月29日の東京(紀尾井ホール)を皮切りに、31日、6月1日の下諏訪(下諏訪総合文化センター)、2日の金沢(石川県立音楽堂コンサートホール)、そして4日の名古屋(愛知県立芸術劇場コンサートホール)と日本公演を行いました。

6月6日には「バルカン室内管弦楽団

日本公演記念パーティー」を行い、102歳の日野原重明先生（聖路加国際病院理事長）が指揮をされまして、バルカンのオケでラデツキー行進曲（ヨハン・シュトラウス1世）をやりました。また、日クロアチア友好議連の谷垣法務大臣をはじめとする皆さまにご挨拶をいただきました。私の諏訪の後援会長で、ひかり味噌の相談役でいらっしゃる林善八郎さん（58回生）も駆けつけてスピーチをしてくださいました。バルカンのこのオケを応援してくださっている方たちが集まってくれた会ですね。

——そして、いよいよ7月5日。1年前の新宿からスタートした「世界平和コンサートへの道」の集大成である、サラエボでの平和祈念コンサートが開かれた。

柳澤 サラエボでのコンサートは、内戦でも崩壊することなく残ったサラエボ国立劇場で行われました。内容は、前半が梯剛之君の演奏でした。彼は生後1カ月ぐらいで小児がんのため失明してしまいましたが、病気とか目が見えないということ音楽で乗り越えてきた人です。今回はモーツァルトのピアノ協奏曲13番を弾き、バルカンのオケが協演しました。彼は府中に住んでいましてね、もともと友達なんです。

後半はベートーベンの第九です。演奏はBCOとサラエボ・フィルハーモニックのコラボの合同オーケストラです。日本から合唱団プラス応援団ということで80名が現地に行きました。それと現地のサラエボ国立劇場オペラ合唱団のメンバーが50人。合計100名の合唱団（ソリストは現地の方）が平和への祈りを込めて歌いあげました。

——サラエボ事件から100年の節目の年に行われた「第九平和祈念コンサート」。



白い墓の地平線が続く、スレプレニツァにて

柳澤さんの指揮の下、「歓喜の歌」を日本人と現地の複数の民族のメンバーによる混合合唱団が歌いあげた後、場内は総立ちの拍手喝さいに包まれたという。民族の壁を乗り越えた音楽、そして平和祈念の強い思いが聴衆の胸を激しく揺さぶったのである。

今こそ、音楽やスポーツが民族、国境を乗り越えるとき

——現在のボスニア・ヘルツェゴビナを取り巻く状況にも触れなければならない。この地を戦場に巻き込み、大混乱に陥れたボスニア・ヘルツェゴビナ紛争は、旧ユーゴスラビアの解体の動きの中で、イスラム教徒（ボシュニャク人＝44%）とクロアチア人（17%）が独立を模索、セルビア人（33%）が反発していた。92年3月、ボスニア・ヘルツェゴビナが独立宣言。その翌月から軍事衝突が始まり、95年12月の和平合意まで3年以上の間、全土で戦闘が繰り返された。

柳澤 サラエボは、84年には共産圏で初の冬季五輪が開催され、他民族による合同開催五輪として世界的な注目を浴びました。その時の競技場はいま、紛争の犠牲者の墓になっています。平和のシンボルである五輪の塔と墓が同時に存在しているのです。92年4月に（紛争はっ発で）サラエボは外界と遮断されてしまいます。諏訪と同じ盆地に市民が閉じ込められてしまったのです。その盆地には、主にクロアチア人、セルビア人、イスラム教徒（ボシュニャク人）が暮らしていました。紛争は、この三つ巴なのですが、途中からクロアチア人とイスラム教徒の人たちが連邦となって、セルビア人との戦いになったのです。盆地の周りをセルビア軍の戦車を取り囲み、街に向かって砲撃をしていました。

——当時、サラエボの外れには外界と通じるトンネルがあったが、ここを通過できるのは政治家や国連職員、軍人らだけで、『脱出への片道切符』と言われた書類を申請できるスロベニア人など一部の人も含め一般市民の大半は通ることができなかったという。

柳澤（当時の）サラエボの街には『スナイパー通り』という所があり、動くも



●やなぎざわ としお

1971年下諏訪生まれ。国立音楽大学器楽科トロンボーン専攻卒業。1996年、ウィーン旅行中にウィーンフィルハーモニー管弦楽団でR.シュトラウス「アルプス交響曲」を指揮する小澤征爾に強く感動し指揮者を志す。1999年に渡仏。パリ・エコール・ノルマル音楽院オーケストラ指揮科に学ぶ。2000年東京国際音楽コンクール指揮部門で第2位受賞。2001年3月に大阪フィルハーモニー交響楽団を指揮してデビュー。2003年にはスイス・ヴェルビエ音楽祭指揮マスタークラス・オーディションに合格し、ジェームズ・レヴァイン、クルト・マズアに師事。バルカン半島（特に旧ユーゴスラヴィア）の民族共栄を願ってバルカン室内管弦楽団を設立し、旧ユーゴスラヴィアを中心に活動を続ける。現在、バルカン管弦楽団音楽監督、コンボフィルハーモニー交響楽団首席指揮者、ベオグラード・シンフォニーエッタ名誉首席指揮者他活躍。著書に「戦場のタクト」（実業之日本社）。

のはみなビルの上から銃撃したんですね。電気も水もない生活でした。爆破で剥き出しになった水道管を銃で撃ち、あふれてきた水を得るという状況です。1リットルの水で体を全部洗うとか、そんな感じだったと聞いています。食べ物も不足し、最後はカタツムリとか雑草とかを食べるという厳しい生活を強いられていたようです。

——絶望的な生活である。しかし、破壊と犠牲の連続の中でも、市民たちは強い心を失わなかった。

サラエボ事件とは

1914年6月28日、ボスニアの州都サラエボの病院を訪問する途中だったオーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子フランツ・フェルディナント夫妻が19歳のボスニア系セルビア人で国家主義者ガヴリロ・プリントツィプによって銃殺された事件。オーストリア＝ハンガリー帝国政府はセルビア政府を非難し、48時間以内に無条件で全条件を受け入れなければ宣戦布告することを通告した。セルビア政府は二点のみを除いてこの要求を受諾したが、1914年7月28日オーストリアは無条件での受諾を求める事前の通告通りセルビアに対して宣戦を布告し、これをきっかけとして第一次世界大戦が勃発した。



平和への祈りを込めて

柳澤 あらゆる建物が破壊される中、100年以上も前に建造された国立劇場だけは残り、コンサートも続いていたそうです。新聞社、学校、病院などはことごとく破壊されましたが、新聞社は地下で印刷を続け、学校は階段教室を続けた。演劇も続いていた。要するに建物は壊れ

第九はEC共通の“国歌”

——BCOの演奏会といえばベートーヴェンの交響曲第9番「合唱」二単調作品125が定番である。日本公演でもサラエボ公演でも演奏された。なぜ、「第九」なのか。

柳澤 コソボにはメディチ・メンジッチという作曲家がつくった国歌があります。コソボはアルバニア人が約9割、セルビア人が約1割、その他にも少数民族の方がいるという国ですが、この国歌には歌詞がないのです。何語でも付けられないからです。こうした難しい状況を抱える中で、「第九」をヨーロッパ全域の共通の国家だと思ふ人が多いのです。

ベートーヴェン(1770年-1827年)の時代というのは、自由・平等・友愛を掲げたフランス革命(1789年)の影響を受けており、階級社会から市民社会への変貌を遂げていく時代です。そういう風潮の中で、「すべての人が兄弟になる」という歌詞の「第九」が生まれた。それが転じて、現代、「第九」はEU共通の国歌であるという認識を持つ人がEU全域で増えています。それで演奏するようになったのです。

ていても、新聞の印刷、学校の教育、誕生日、結婚式、葬式といったソフト面は最後まで残った。これがサラエボのスピリットというわけです。

——2014年。サラエボ事件から100年のいま、この地の現状はどうなっているのか。

柳澤 今回の節目の年に、イスラム教徒とクロアチア人の方たちが100年のイベントを一緒にやりましょうと、セルビア人の方たちにも言っているのです。ところが、セルビアの人たちの中には、(サラエボ事件で)オーストリア皇太子夫妻を殺害したガブリロ・プリンツィプという青年をヒーローと考え、銅像を建てたいという動きもある。もちろん、イスラム教徒もクロアチア人も反対です。ガブリロ・プリンツィプはテロリストなのか英雄なのか、という思い、ジレンマがまだ存在しています。

このように政治的にはまだまだ大変な状況ですが、音楽とかスポーツが国境を乗り越えていかないといけな。今年、オシム監督(サッカー元日本代表監督)もおっしゃっていましたが、ワールドカップに初めて民族合同チームで参加したことが、「民族を乗り越えていく象徴だ」と話題になっていました。

いまだに約100人の遺体がDNA鑑定され、埋葬されている

——ボスニア・ヘルツェゴビナ滞在中、柳澤さんはサラエボ郊外のスレブレニツァを訪れた。1995年7月11日、国連安全地帯だったこの街をセルビア軍が制圧し、数日間の間に歴史に残る虐殺が繰り広げられたのである。

柳澤 この虐殺でイスラム教徒(ボシュニャク人)8000人以上の死者、行方不明者が出たとされています。この地は今、お墓の地平線になっているのです。皆さんイスラム教徒ですから、メッカの方向に向かってお墓が建っています。そのお墓には、いまだに毎年100人ほどの方の遺体がDNA鑑定を受けて埋葬されているのです。亡くなった方の名簿には名前横に生年月日はあるのですが、亡くなった日は書かれていない。同じ日だからで

すが、それがまたショッキングですね。

この街の山の中の道を行くと、黄色い線があり、そこから先には入れないようになっています。おびたしい数の地雷が埋まっているのです。セルビア軍が自分たちの基地を守るために埋めたものです。この地雷は、オタワ条約で2019年までに全部撤去することになっています。——一瞬のうちに多くの命が奪われ、おびたしい数の地雷が残されたスレブレニツァの街にも、難民として避難していた人たちが帰って来るようになった。

柳澤 彼らは当然、失職していますから、そのままでは生活ができません。そこでJICA(国際協力機構)が、養蜂だとかジャガイモ、タマネギ、ラズベリーなどの栽培を指導し、出荷できるまで来ています。「民族を乗り越えるのだったら支援しましょう」という日本の技術支援で、大地さえ生命力がなかったこの地で農業が再開され、人々に笑顔が戻り、大地に新しい息吹が生まれてきているのです。その現実が実に印象的でしたね。——紛争終結から19年。いまだに大きな傷跡が残る中で、懸命に民族の争いを乗り越え、再生への道を進もうとしているボスニア・ヘルツェゴビナ。

柳澤 こういう地で演奏会ができたことに大きな意義があると思いますね。

楽団員がもらした「世界市民」の考え方に共鳴

——今回の演奏会を実施する過程の中で、楽団員のひとりの女性が「世界市民」という言葉を発した。その思いを聞いた柳澤さんは、あらためて人と人が会うことの大切さ、音楽を通じて人と人のつながりを深めることの意義を痛感したという。

柳澤 世界市民という言葉が発したのは、



JICA(国際協力機構)の指導により、農作物を収穫できるように

クロアチア人とセルビア人のハーフであるゴルダナ・ブラジノビッチさんという女性で、バイオリニストとしてBCOに参加しています。この国にはハーフの方が多く、楽団員にもいます。ボスニア人(ボシュニャク人)とセルビア人のハーフ、クロアチア人とセルビア人のハーフなどですね。こうした状況の中で、彼女が、父母が敵対していた民族だったので、子どもに対する歴史教育が非常に難しいと言うのです。

学校での歴史教育、国営放送の報道内容は、どの民族が傷つけたというネガティブなものばかり。子どものころからそういう教育や報道に接していると、大人になってもネガティブな考え方が染み付いてしまうというのです。

これまでは新たに会った人を見る時、①どの民族か、②どの国に住んでいるか、③どの宗教か——この3つの見方で判断してしまっただけで、でも、そうではなく、同じ時代に地球上に生まれた世界市民として考えたい。みんなが世界市民と考えられるようになったら、かつての見方で人を見るのではなく、比べるのではなく、仲良くできるのではないかと。これが近隣民族、諸国との共存共栄が可能となるキーワードになるのではないかと、言うのです。これは私たち、日本人にとっても非常に参考になる考え方だと思います。

我々がBCOを通して学んだことは、人と人が会うことの大切さですね。教育や報道を通じて日々、いろんな影響を受けて概念が出来上がっていますが、実際会ってみると普通の市民なんですね。そこから世界市民という考え方、発想が出てくる。それを私自身、彼女やBCOから学びましたね。

「千萬人吾往矣」の精神で EU 全域の中で活動していきたい

——サラエボでの節目のコンサートを成功裏に終えた柳澤さん、今後のBCOの活動をどう考えているのか。

柳澤 BCOを2007年に立ち上げてから今までは、紛争していた当事者たちが楽団と一緒にいるというだけでよかった。それだけで非常にブレイクスルーであっ

たからです。これからは、本当に彼らにとってステータスと思えるような楽団にしていく必要があります。そもそもバルカンという名前自体が、治安、経済、教育、医療などの水準の低さからネガティブに受け止められています。(このエリアでは経済が発展している) クロアチアに行くと、バルカンという名前が付くものには協力したいという意見もあるほどです。それなのにあってBCO、バルカンと言っている以上、そのバルカンの地に、彼らがステータスと思えて、なおかつ西側の人たちも認めるようなものを作っていかなければいけない。これからの10年というのは、楽団のクオリティを上げて、西側の人たちから認めてもらえるようなオーケストラにしていくことが大事だと思います。

——そのためにはどんな活動が必要になってくるのか？

柳澤 まずは、いい音楽家を集めるということですね。西側に出て行ってしまった東側の人たちも含めてですね。そして世界各国での演奏会を展開していきたいですね。EUはすべての国が一緒にやっというつもりでやっていますが、文化圏に関しては東西に分かれているイメージがあります。そうした中で日本人としてEU文化圏の橋渡しをしていきたい。私自身、清陵時代、吹奏楽部の学生指揮者をしていたのですが、進路指導はできないからと言われ、自分自身で模索しました。こ

れからのことも一緒です。文化の橋渡しというのは、人と人をつなげていくということです。そのために音楽が媒体になるというのはいいことなので、これまでも旧ユーゴで活動中に思い出した「千万人と雖も吾往かん」という精神で、BCOを通じてEU全域の中で活動していけるようになっていきたいと思っています。

——その活動の一環が、バルカンの音楽家を世に送り出していくこと。8月6日にキングレコードからBCOのCDが発売された。

柳澤 私は旧ユーゴで10年以上活動してきましたが、楽器店もCDショップもない中で、現地の作曲家を世に広めるにはコンサートしかありませんでした。それで演奏会では旧ユーゴの作曲家の作品を取り上げてきました。これからはどんどん世界に送り出していきたいですね。BCOのCDには、コソボ作曲家のバルトン・ベチリさんの「スピリット・オブ・トラディション」や、BCO定番のショスタコーヴィチの「室内交響曲〜ファシズムと戦争犠牲者に捧ぐ」などが収録されています。紛争から平和への願いを込めたアルバムになっています。ぜひ、みなさまに聞いていただきたいですね。

——民族、国境を乗り越え、世界市民という考え方、発想で世界平和を希求し、EU全体の橋渡しを目指す柳澤さん。今後のますますのご健勝、ご活躍をお祈りしたい。(取材・構成/山田 隼)

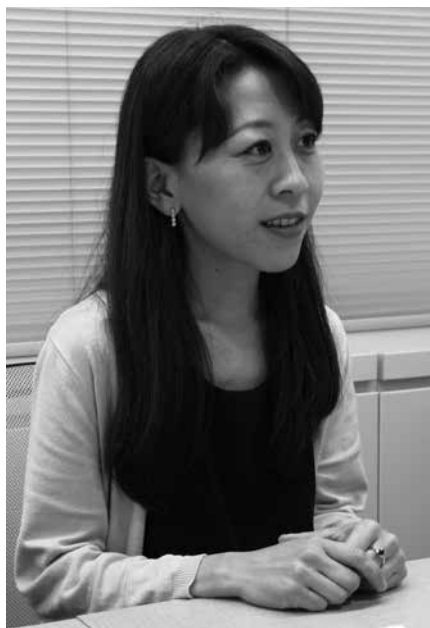
若き清陵生へのメッセージ!

語学は若いうちにやっておくべき

柳澤 旧ユーゴに行くと痛感したのですが、国力が弱いので、彼らとはとにかく海外に出たいという思いが強い。そこで必死に英語を身につけてプロクンでも、どんどんしゃべるんです。自分自身はというと、諏訪清陵に行くとと思えないほどしゃべれない(笑)。とにかく、しゃべらないとしゃべれるようにならない。瞬時の脳の判断が必要なので、これはもう間違いなく若いころからやっておくべきです。

海外に行くことで日本の良さを知る

柳澤 外に出ることで日本の良さ、諏訪の良さが分かります。国が国として成り立っているという、日本人にとっては当たり前前のが、海外に行くとは実は大変なことなんだと分かります。たとえば、コソボは今いろんな法律を作っている最中ですが、5歳の子供がたばこを買ってしまう。麻薬の取引も多い。日本ほどいろんなことが整っている国はない。海外に出ることで日本の素晴らしさを分かった上で、良さを伸ばしてもらいたいですね。諏訪の良さ、諏訪清陵の素晴らしさも同じです。東京に出て、社会人になって初めて分かる。清陵のOBの結びつきは、他にないほど強いものがあります。「清陵だから助けてやろう」ということになる。私自身、公演でもずいぶんご協力いただきました。自分たちの学校の良さを、いつかしみじみと分かっていたいただきたいですね。



清陵OGの音楽家へインタビュー

諏訪の自然と 自由に育まれた “私の音楽”

★浜 まゆみさん(96回生) マリンビスト

木琴の仲間ながら、相当大きな姿形を持つマリンバ。鍵盤の下には各音によって長さを変えた共鳴用の金属管が設けられており、その下端を閉じることにより鍵盤の音を共鳴し増幅させて、豊かな音色を奏でる。そんなマリンバに魅せられた清陵OGがいる。そんな浜さんの音楽観について伺った。

—数ある楽器の中からマリンバを選んだ理由を聞かせてください？

浜 5歳からマリンバを始めたのですが、マリンバのためにかかれた曲ではなくて、ヴァイオリンやピアノのための曲を弾いていたんです。ところが、諏訪で開かれた安倍先生のマリンバの演奏会に行き、びっくり。自分が弾いていたのはマリンバじゃなくて木琴だった、ということに初めて気がついて、マリンバのああいう音を弾きたいなど。

—安倍先生というのは、浜さんの大学時代の恩師で、世界的にもマリンバの第一人者である安倍圭子先生ですね。

浜 はい、そうです。77歳になられますが、今でも世界を飛び回っていらっしゃいます。私が諏訪でマリンバを習っていた先生が、大学生の頃に安倍先生のレッスンを受けていて面識があるからと、レッスンを申し込んで下さって。10歳の時でした。それで、安倍先生の東京のご自宅までレッスンに伺ったんです。私は小柄だったので、マリンバを弾くのに台に乗らないと届かなくて。だから、父にその台を作ってもらって、諏訪から東京まで担いで電車に乗って行きました。

—“世界の安倍”先生のレッスンはどうだったんですか？

浜 ちょうどそのとき、先生は小学校の音楽の教科書に載せる曲を依頼されていて、私は小学校4年生だったので、「あなたちょうどいいわ。できたばかりの曲なんだけど、感想を聞かせてくれ

る？」って言われて、目の前で弾いて下さったんです。先生のお弟子さんは大学生以上の方ばかりでしたから、小学生は珍しかったんでしょう。私が持っていたマリンバは4オクターブだったんですが、先生のマリンバは5オクターブで、下の音を使って演奏する曲だったんですね。それまで私は、軽快な楽しい曲、速い曲ばかり弾いていたので、その時初めてマリンバの、低い音の和音の響きとか、豊かな響きにもものすごく驚いて、こういう豊かな響きを私も出してみたいと思ったんです。マリンバは木の楽器なので、低音の響きは心が落ち着くというか癒やされるというか。でも、打楽器なので凄く激しい音楽もできるっていう、その二面性が魅力的でした。それがマリンバを続けることになった理由でしょうか。

—マリンバは、ピアノのように調弦は必要ないんでしょうか？

浜 私が使っている「安倍モデル」のパイプは、低音のパイプの「ド」から「ファ」まで、1本ずつ響きが調整できます。リハーサルが終わった状態で響きの調整をしていくんですが、温度で響きが変わってしまうんですね。リハーサルのときは舞台のスポットライトがあたって温度が上がっているのですが、リハーサルが終わって本番までの間にスポットライトを消すと、冷えちゃって響きが変わってしまうんです。そして、お客さんが入ってきてちょっと温度が上がったり、空調を入れて温度が下がってしまったり、と。

マレット（ばち）の選択も難しいです。リハーサルの時は客席には人がいません。でも本番で人が入ると、服に音が吸われてしまったりするので、これでいいかなと思って選んでいたマレットが合わなかったり。そういう意味では調節できて嬉しい反面、悲しいこともたくさんあって。

—浜さんのコンサートを見ていると、ステージ上を走り回って、重労働ですね。

浜 マリンバはマレットの動きを見たいっていうお客さんも多いですね。コンサートが終わると、「どのくらい体重が落ちるんですか？」と聞かれます（笑い）。でも、本番は2時間だけなので、実はまだまだ楽なんですよ。会場に合わせてマレットを選ばなくてはいけなくて、リハーサルに3時間から4時間かかるんです。ですから、2時間のプログラムを2回から3回、決まらないときは4回やります。でもその前に、108kgある楽器を持ってきて、運んで組み立てていますから。それから4時間のリハーサルをやって、その後本番なので、本番の時が一番疲れていることになります。それが終わると、また片付けが待っている…。

—音大への進学は清陵生としてはかなり珍しいと思いますが。

浜 清陵の頃、まわりに音楽をやっている人がいなかったんで、友達がマリンバを珍しがって、演奏すると「じょうずだね、じょうずだね」と褒められて。褒められると、なんかちょっと嬉しくなって、ノセられて。周りにマリンバを弾く人が

●はま まゆみ

桐朋学園大学 音楽学部演奏学科打楽器科マリンバ専攻を首席で卒業。同大学研究科修了後、アメリカミシガン大学 打楽器科大学院留学。1999年、岡谷カノラホールで行われた第2回世界マリンバコンクール第2位。これまでに東京交響楽団との共演、Percussive Arts Society (国際打楽器芸術協会) コンベンションにおいて世界初演されたパーカッションオペラ“The Shattered Mirror”に出演。同じく Percussive Arts Society コンベンションにおいてThe New Music / Research Day “Time for Marimba”にて世界を代表するマリンバ奏者の一人として招聘演奏・パネリストとして出席。国内はもとよりアメリカ、アジア、欧州の各地でも演奏活動を行なう傍らで、学校・公共施設・福祉施設・病院などでトークを交えながら幅広い層に親しめるサロンコンサートも行なっている。

★公演スケジュール★

10月24日～26日 マリンバデュオコンチェルト(世界初演) with San Francisco Chamber Orchestra (アメリカ)

11月22日 浜まゆみ&クリス・フロー デュオリサイタル(東京都・JTアートホール)

3m近い幅のマリンバに向かい、片手に2本ずつマレット(ばち)を持って弾く浜さん



いないので、自分がはたしてどれくらいのレベルかもわからなかったです。進路を決めるときに、普通の大学を受験したらマリンバを持って東京へは行けない。防音の部屋を借りるのは高いですし、わざわざ普通の大学生が持っていくものではない。となると、夏休みとかで実家に帰ってきたときに弾くくらいかな。でも、5歳からずっといつも自分の隣にあって、小さな頃は私は練習をやると思ってやるタイプではなくて、弾きたいときに弾くタイプだったので、朝起きて1曲弾く、学校へ行く前に弾く、帰ってきて弾く、そして寝る前に弾くってというような感じで、弾きたいときに弾いていた。ですから、自分が弾きたいなって思ったときにマリンバがないことが悲しいっていうのと、大学を出て会社に勤めたらもっともって弾けなくなるんだなって思ったときに、マリンバがなくなることは自分じゃないような気がして。それだったら、音大を受けよう。

——桐朋学園大学でしたよね？

浜 音大に行ったら、清陵とはまったく真逆な環境で、清陵は男子が多かったのに、音大は女子ばかり。附属からずっと上がってきている人も多かったですし、なかなか馴染めなかったです。でも桐朋学園大学は、どちらかというと教育者を目指す人よりは演奏者を目指す人が多い学校なので、一匹狼的という変ですけど、自分のことは自分でやっていく、自分で目標を持ってやっていくっていう感

じだったの。そういう意味では清陵の自由な校風や、自分の気になったことに没頭して我が道を行くっていうような、そういうところと似てるなと思いました。ですから、初めは馴染めなかったんですけど、清陵時代を思い出してから、楽しくなりました。

——浜さんにとっての音楽って、どんなものなのでしょう？

浜 現代マリンバに関しては日本が発祥の地と言っても決して過言ではないんですね。それだけ、日本人作曲家の書いた曲がたくさんありますし、日本へ留学生もたくさん来ますし。これは安倍先生の功績が大きいんですが、でも、日本人作曲家の曲って独特なんです。日本的なんです。曲の間に「ヤッ」とか「ヨッ」とか、かけ声が入っていたりとか、日本人特有の「間」があるんです。普通、休符っていうのは、32分休符とか、8分休符、4分休符って決まっているんですけど、日本の曲には休符では表せない独特なものがある。その日本人の「間」は決めきれられないので、○とか△とか●とか□といった、いろいろなマークが楽譜に並んでいるんです。10個か11個。それを見て、これは長いとかこれは短いとか、自分で間隔を変えて演奏するんですが、奏者によってまったく違う曲になるんです。

——そうなんですか。

浜 その頃日本ブームで、皆さん日本のことをよく知っていて、「悟りと関係あるのか」とか「無の境地」とか、そうい

う話になって、文化を知ることによって初めて音楽が理解できる。でも知ったからといって、それが100%日本人と同じように同じ「間」で弾けるかっていったら、それは難しい。やっぱり、日本人として聴いたときに、かけ声がおかしかったりするんですよ。日本人だったら、「ヤッ」って短く言うところを「ヤー——」って伸ばしていったり、「ヤーハッ」と下から上がっていかなくてはいけないのに「ヤーハ」と下がっていっちゃったり。「ヤッ」っていう「ヤ」が、日本人だとエネルギーを溜めて、「ヤ」って言った勢いで次に入る、エネルギーを溜めるための「ヤ」。ダムじゃないんですけど、それが崩れたから次へ勢いよく入れる。でも外国の方は、その「ヤ」がエネルギーを溜めるための「ヤ」だってわからない。だから、「ヤ」のあと、とことことこと……みたいな。でも外国の方の演奏を聴いて、「そういう風に捕らえるんだ、外国の人たちは」っていう新たな発見もあります。だから何も、無理して真似る必要なんてないんです。すべてを日本人と同じように弾けばいいっていうものでもない。それが音楽なんだろうなって感じました。自分の生い立ちとか、自分のバックグラウンドとか、いろいろなものが合わさってできるのがその人の音楽なんだろうと。

ですから、自分の音楽にも、自分の生きてきた姿が表れているんだと思います。

(取材・構成/田中達也)

清陵OBの音楽家へインタビュー

清陵時代のアメリカ留学で
ボブ・ディランの曲に出会った

★三浦 久氏(67回生) フォークシンガー(信州大非常勤講師)

1960年代に2度のアメリカ留学を経験し、フォークシンガーになった男がいる。ラジオから流れてきたボブ・ディランの「風に吹かれて」に大きな衝撃を受けた。68歳の今も自身が経営する辰野のライブハウス・オーリアッドなどで活動が続いている。そんな彼とフォークソングとの出会いは、清陵時代に遡る。

●みうら ひさし

白髪交じりの長髪にひげ姿。辰野にある山荘のような素敵な自宅でお目にかかった三浦さんは、哲学者のような雰囲気を感じさせていた。書棚には哲学書、宗教書から小説の全集までギッシリと並んでいる。会った瞬間から強烈なインパクトを受けた。三浦さんは68歳の現在も、ご自身が経営するオーリアッドなどでフォークシンガーとしての活動を続けている。その一方で、週に3回、信州大学の非常勤講師として英語(比較文学)を教えている。清陵時代に1年間、AFS留学生としてカリフォルニア・サンタローザの高校に留学。ケネディ大統領暗殺の直後、友人の車のラジオから流れてきたボブ・ディランの「風に吹かれて」に大きな衝撃を受けた。大学時代、今度はカリフォルニア大学サンタバーバラ校に留学。この間に会った多くの人々との交流、カウンター・カルチャーの影響、禅への傾倒…。濃密な3年間を過ごした三浦さんが下した結論は「フォークシンガーになる」というものだった。帰国後の三浦さんに、どんな人生が待ち受けていたのか――。

人生を決定づけた2度の
カリフォルニア留学

三浦 清陵に入ったころはクラシックギターの教則本を見ながら簡単な小品を独習していました。そのうち、同級生からコードを弾いて歌うことを教えてもらったのです。ほくを入れて5人でわかバンドを作り、清陵祭で「ユー・アー・マイ・サンシャイン」などを歌いました。もともと、ほくは後ろでギターを弾くふりをしていただけですが(笑)。

——1963年8月、三浦さんはAFS留学生としてサンタローザのモンゴメリー高校に留学した。その年の11月22日、ケネディ大統領が暗殺された。

三浦 タイピングの授業中でした。突然、教室のスピーカーから、ダラスで大統領が撃たれたというアナウンスが流れてきました。教室は騒然となり、泣き出す者もいました。その数週間後、友達とヒッチコックの『鳥』が撮影されたボディガ・ベイまでドライブしたとき、ラジオから悲しみと怒りが混ざり合ったしゃがれ声の歌が流れてきました。この歌を聞いたとき、歌詞は聞き取れませんでした。すごく興奮しました。後で歌詞を覚えてもらいました。「どれだけ道を歩いたら人間と呼ばれるのか」「どれだけ大砲の弾が飛んだら戦争は終わるのか」。ボブ・ディランの「風に吹かれて」でした。こういうことを歌にしてもいいんだと驚きました。

——1年間の留学生生活を終え、帰国した三浦さんは半年間、清陵の1年下のクラスに入り、翌年、国際基督教大学に進学した。

三浦 2年生のGW明け、キャンパスの芝生の上で友人と雑談していたとき、一枚の紙が風に舞ってきました。カリフォルニア大学サンタバーバラ校の奨学生募集のチラシでした。授業料免除、奨学金付きという魅力的な内容でしたが、渡航費15万円は自己負担だったのです。アルバイト料1時間100円の時代です。無理とは思いつつ、夏休み中、諏訪のカメラ工場で働きました。僅かな貯金と当てにできる餞別を足しても5万円足りません。諦めざるをえませんでした。そん

なとき、プレスで指を怪我してしまったのです。翌日、社長さんがやってきていろいろ聞かれました。事情を話したら、「5時に仕事が終わったら私の部屋にきなさい」と言われました。仕事が終わって訪ねて行くと「勉強というのは若いときにしかできないからね」と5万円の入った封筒を渡してくれました。こうして1966年9月、再びカリフォルニアに渡ったのです。

——サンタバーバラで最初に住んだ寮で学生が繰り返し聞いていたレコードの歌詞が三浦さんの胸を打った。「今日のことは明日まで忘れさせてくれ」というディランの「ミスター・タン布林マン」の一節だった。三浦さんは著書『追憶の60年代カリフォルニア』(平凡社新書)の中で、「<風に吹かれて>を通してディランを知ったが、彼と出会うことができたのは<ミスター・タン布林マン>のおかげである」と記している。こうして怒涛のサンタバーバラ時代が始まる。

三浦 当時アメリカはベトナム反戦運動、カウンター・カルチャーの時代でした。将来は国連のような機関で働きたいと思っていたので、政治学を専攻していましたが、その時代の空気に大きな影響を受け、半年後、専攻を宗教学に変えました。母に日本の宗教に関する本を送ってくれと手紙を書いたら、10冊の本が送られてきました。その中に紀野一義著『禅—現代に生きるもの』がありました。著者と南禅寺の柴山全慶老師との出会いの話が印象的でした。69年2月、その柴山老師がUCSBに講演にやって来たのです。福島元照さん(後の東福寺管長福島慶道老師)と共に来られたのですが、講演の後、ほくのアパートに来て、坐禅の指導をしてくれました。ゼンマスターが来るというので20人もの学生が集ま

りました。

——禅への傾倒を深めていった三浦さんだが、その一方で歌を作り、フォークソングを歌い続けていた。

三浦 今と違って、当時日本のことは3ヵ月遅れで図書館に入る新聞や雑誌でしか知ることができませんでした。68年のことだったと思います。「帰ってきたヨッパライ」という歌が日本で大ヒットしていると知りました。ロスのリトル東京へ行ったとき、食堂のジュークボックスでその歌を聞きました。この歌がヒットするなら、ぼくの歌もなんとかなるかもと思いました。それが間違いのもとでした(笑)。

——いよいよ帰国が迫ってきた。三浦さんは帰国後の身の振り方を決めかねていた。①南禅寺で修行する ②フォークシンガーになる ③宗教学の研究者になる—3つの選択肢があった。

三浦 帰国を目前に控えた69年7月、仲間たちと曹洞宗の禅センターがあるタサハラに行きました。そこで指導していたのは、後にスティーブ・ジョブズの師として知られるようになった乙川弘文さんでした。4日間、アメリカ人の雲水と生活を共にした後、ビッグサーへ行きました。その晩、大きな岩上で自問しました。日本に帰ったら何をしたいのかと。そのとき心から願ったことは、フォークシンガーになりたい、アーティストでありたいということでした。

70年夏、鎌倉・円覚寺での「深い縁の不思議な出会い」

——帰国した三浦さんは、関西フォークのメッカ京都に住み始め、フォークシンガーを目指したが、紆余曲折を経て京大の大学院に入り、仏教学を学ぶようになる。

三浦 大学院に入る前でした、紀野先生が京都に講演に来られました。そのとき、ぼくの歌のテープをお渡ししました。半年ほどたったころ先生から連絡があり、鎌倉の円覚寺で行われる会で歌ってもらえないかと依頼されました。

——この円覚寺での会には、その後の三浦さんの人生を大きく左右する運命的な出会いが待っていた。

三浦 この会では「私は風の声聞いた」

や「山頭火」などを歌いました。聴衆の中に、近畿放送(現KBS京都)のレコード室に勤めていた田中さんという女性がありました。彼女のおかげで、ぼくはPEP(後の京都レコード)という音楽事務所に入ることになりました。その事務所にはすでに河島英五とやしきたかじんがいました。

——PEPに所属した三浦さんは72年、デビューシングル『山頭火』をリリースした。大学院2回生のときだった。また、新たな出会いが待っていた。

三浦 京都産業大学の学園祭で歌ったとき、2人の学生がやってきて「前座で歌わせてほしい」と言うのです。清水国明と原田伸郎でした。彼らはぼくの下宿にきていろんな歌を歌ってくれました。聞きながら笑い転げました。京都の十字屋ホールでのコンサートの前、PEPの中川社長に「産大の2人に前座で歌わせてほしい。彼らは将来河原町にビルを建てますよ」とお願いしました。最初は渋っていましたが、2曲ならいいということになりました。そのときの1曲が「赤とんぼの唄」で、半年後には彼らは全国区のスターになっていました。歌もギターも下手くそなぼくが大手のレコード会社からレコードを出すことができたのは、彼らの活躍のおかげだと思っています。

80年代、故郷の辰野に戻り 教員生活 天安門事件をきっかけに音楽活動を再開

——三浦さんは修士課程修了後、精華短大や京都産業大学で教えながら、音楽活動を続ける。しかし「思ったように評価されず」、80年代初め、自分の食べるものぐらいい自分で育てたいと、信州に戻る決心をする。そんなとき、地元で短大ができ、開学と共に教え始める。それとともに音楽活動を中止した。再開したのは89年の天安門事件がきっかけだった。

三浦 天安門広場で1人の若者が戦車の前に立ちはだかる姿に衝撃を受けました。「見えない戦車」から逃げている自分自身に気づかされたんです。本当にぼくがしたいことは歌うことだということに気づかされたんです。その後しばらくして、



タサハラのZen Mountain Centerの入口で撮った写真。アメリカ時代はお金がなく、あまり写真を撮ることがなかった、という。

地元のテレビ局のドキュメンタリー番組で歌ったことがありました。それが東京でも流れ、ぼくの1枚目のアルバムの編曲者だったクニ河内さんが見ていて、会いに来てくれました。彼の協力で『セカンド・ウインド』というアルバムができました。

2011年12月に通算10枚目のアルバム『祈り』がリリースされた。3.11に触発された作ったアルバムである。

三浦 大震災の直後、世界中の人々が心をひとつにして祈り、援助の手を差し伸べてくれるのを見たとき思いました。百年後、千年後の歴史家たちが「人類の生き方が変わったのは2011年だった。人類の意識が進化したのは2011年だった」と言うかもしれない。このアルバムは、そんなぼくの夢や願いを込めたアルバムです。

——これからの活動はどうされますか。

三浦 これからも僅かばかりの畑を耕しながら、細々と歌って行くつもりです。請われればどこへでも歌いに行くつもりです。でも古希を迎える歳になり、重いギターや機材を運んで歌いに行くことはだんだんハードになってきました。これからはもう少し翻訳に力を入れようかなと考えているところです。「花子とアン」の影響かな。

——2時間ほどのインタビューの間、音楽と宗教、哲学がコラボした実に奥の深い世界が展開されていった。最後に、ギターの生演奏で「祈りの歌」と最近の曲「管野有恒」を披露して下さった。それは、まさに魂の歌だった。

(取材・構成/山田 稔)

特別寄稿

諏訪の地と音楽の結びつき

諏訪の文化の中核、諏訪響を支えた清水ヶ丘の友たち

★武井勇二(59回生)

諏訪の地と音楽は、いったいどんな結びつきがあるのだろうか？

いや、諏訪の地が音楽家を育んだ礎はどこになるのだろうか？

清陵OBで諏訪交響楽団会長を務める武井勇二さんに語っていただいた。

諏中・清陵卒業生の中には学問的秀才といわば精神文化的秀才が混在していたと思うが、諏訪の音楽活動の中核、公益社団法人諏訪交響楽団は大正末期諏訪地域の当時の熱意ある青年によって結成された日本最古のアマチュアオーケストラである。

創成期の人材、以降の人材の中に清水ヶ丘に育った、いわば精神文化的体質を持った何人かがいて、諏訪響を現在まで引っ張ってきた。諏訪響に入団した数多い同窓生の中で特にその中心となって団の発展に貢献してきた何人かを現在も含めて紹介する。

黎明期

明治34年入学・岡谷長地の渡邊忠雄(7回生)は牧師となりフィンランドに渡り、フィンランド神学校を経てフィンランド人女性シーリさんと結婚。我が国最初の国際的指揮者渡邊暁雄を生んだ。この縁で暁雄は1975年から1990年の亡くなる

直前まで諏訪響を指導・育成した。これが現在下諏訪で行われている北欧音楽祭すわの起点となっている。

明治44年入学・下諏訪の三輪良三(17回生)は歯科医となって下諏訪に残るが、日本歯科医専時代東京で影響を受けた西洋音楽への憧れを捨て切れず、同人の塩尻から諏訪に移り住んだ今井久雄と組んで、大正14年7月現在の諏訪交響楽団の前身・諏訪フィルハーモニーを創設した。これは昭和26年に社団法人諏訪交響楽団となり、その後の活動が公に認められ、平成25年には公益社団法人諏訪交響楽団となった。

当時血気盛んな諏訪の青年が、作家・武者小路実篤の白樺派運動に共鳴し、精神高揚の発露を西洋音楽の演奏に求めたのであった。三輪はホルンを担当した。

大正3年入学の下諏訪の新村良太郎(20回生)は諏訪響では創設期の指揮、音楽指導を担当した。

大正15年入学・下諏訪の両角俊一(32回生)が若くしてこれに加わりチェロを担当した。昭和35年理事長となり、諏訪響の中期の大事な時期を自身も指揮をしながら育成した。

同じく大正15年入学・下諏訪の小口耕平(32回生)は歯科医をしながらヴァイオリンでこれに参加し、副理事長、コンサートマスターをしながら多くの後進を育成した。

立ち上げ期

諏訪響はその後創設者の子息等が後を継ぎ、徐々に立ちあがって行った。

昭和2年入学・上諏訪の今井仁(33回生)は諏中から珍しく上野音楽学校(現東京芸大)のヴァイオリン科を出て入団、

広島師範学校で教鞭をとるも原爆に遭遇早逝。

昭和6年入学・岡谷長地の今井信雄(37回生)は国学院大学から成城学園中学校の教諭となり、指揮者・小澤征爾の受持ち担任となったが、小澤が音楽の道に進んだのは今井信雄の進言によるものだった。今でも小澤は今井を恩師として深く尊敬している。実は今井と諏中同期に下諏訪の石井陸蔵がおり、昭和38年、今井と石井は協力して小澤に諏訪響を振らせるよう説得した。その結果、昭和39年1月25日、北沢会館(現在の諏訪市文化センター)で諏訪響と小澤のベートーヴェン交響曲「運命」共演が実現した。この二人がいなかったら、諏訪響と小澤が共演することはなかった。その後、この縁で実現したサイトウ・キネン・フェスティバル松本もなかったと思うと、清水ヶ丘の友の連携の深さを感じざるを得ない。

昭和2年入学・富士見町の柳田昱也(33回生)は当時としては珍しく国立音楽大学を出て、長野県内の音楽教諭として活躍、常に諏訪響を温かく支えてきた。昭和29年長野県交響楽団連盟を創設、初代理事長を務めた。柳田は1970年代から20年の長きにわたり、信濃教育会と連携して県内の音楽教諭を選抜、毎年ウィーン旅行を企画し、自身が案内役となって研修を重ねた。

明治45年入学・上諏訪の関貞英(18回生)はフルートで入団したが、家業は諏訪随一の料亭で、親を説得して関楼ホールという木造の音楽ホールを作ってしまった。400人位の長椅子の何とも趣のあるホールで、諏訪響の演奏会はもちろん諏訪地区のクラシック音楽の殿堂として昭和38年頃まで地域の人に愛された。これがあるため、昭和の名演奏家・チェロの斎藤秀雄、ピアノの安川加寿子、松浦豊明、ヴァイオリンの外山滋らが来諏

諏訪交響楽団

主に諏訪地方に在住する管弦楽愛好者で組織しているアマチュア・オーケストラ。1925年(大正14年)の諏訪ストリングソサエティを発端として歴史が長く、1999年(平成11年)6月、ウィーン・コンツェルトハウス・モーツァルトザールにて海外公演を行うなど、アマチュア楽団の中でも特に活発な活動が見られる。現在、団員は70人を越え、本格的な交響楽団の形も整い、ベートーヴェンの「第九」を始め、チャイコフスキーやマーラーなどの交響曲を演奏する。週1回の練習と、年2回の定期演奏会、県民コンサートなどの演奏活動を行っている。

社団法人諏訪交響楽団
理事長：丸茂洋一(82回生)
事務所所在地
〒393-0042 長野県下諏訪町北四王5185
<http://www.suwakyo.com/index.html>

※第156回定期演奏会は、平成26年10月12日(日)に下諏訪文化会館で行われる。

した。やがてこの地籍は諏訪市民会館とか駅前市民会館とかに変遷していった。諏訪響は現諏訪市文化センター北沢会館の完成とともに演奏会場はそちらに変えて行った。確か小澤征爾が諏訪に来た昭和39年頃である。

今は岡谷のカノラホールが定期公演のメインホールとなっているが、関楼ホールが諏訪地区の音楽ホールの原点であった。諏訪の音楽文化の殿堂として一石を投じた関貞英は尊敬に値する。

諏訪響にとっての音楽活動は演奏の場と練習の場であるが練習場所はかつては下諏訪町、今は諏訪市が文化支援として温かい理解で提供してくれている。

中堅育つ

昭和10年入学下諏訪の今井光也(41回生)はフルートで入団、のちに指揮を担当したが、昭和37年東京オリンピックのファンファーレの作曲に応募し、見事入選。これで今井は世界的な名声を得た。晩年諏訪響の名譽会長を務め、本年5月6日、92歳で天寿を全うした。

昭和11年入学・下諏訪の藤森一男(42回生)はファゴットで入団諏訪響事務局長として長年団運営実務を全うした。

昭和15年入学・下諏訪の歯科医三輪光弘(45回生)はホルンで入団、昭和53年より理事長として団に貢献した。特に大曲の挑戦、楽器の整備に尽力した。

オーケストラ円熟期に

昭和18年入学・下諏訪の新村幹男(49回生)はヴァイオリンで入団、コンサートマスター、昭和62年より理事長として貢献。昭和20年入学・上諏訪の矢島孝(第51回生)はティンパニー奏者として長年貢献。

昭和26年入学・上諏訪の三沢祥良(56回生)はコントラバスで入団、自身も幅広い演奏活動で貢献した。

昭和27年入学・上諏訪の岩佐時雄(58回生)はチェロで入団、チェロのトップ、副理事長として貢献。

昭和28年入学・下諏訪の武井勇二(59回生)はヴァイオリンで入団、事務局長、平成7年より理事長を務めた。昭和39年小澤征爾との初対面を縁に、小澤・サイ

トウ・キネン・オーケストラの支援に協力した。現在諏訪響会長。

昭和30年入学・上諏訪の野澤彰治郎(61回生)はチェロで入団、監事として貢献。昭和30年入学・上諏訪の伊藤威(61回生)はチェロで入団、現在副理事長で、団の公的役割を一手に担当・掌握している。

昭和34年入学・上諏訪の保坂俊正(65回生)ヴァイオリンで入団、長年指揮で貢献、平成17年より理事長。また諏訪の合唱界の指導者としての役割を果たしている。

そして、今

諏訪響近年は女子の同窓生も含めて若いメンバーが入団し、清水ヶ丘の友たちが創成期からリードしてきたように今も音楽を通じて諏訪の精神文化を背負っている。

昭和51年入学・茅野の丸茂洋一(82回生)はコントラバスで入団、現在理事長として貢献しており、諏訪のみならず県下の音楽界をリードしている。

昭和60年入学・下諏訪出身の滝澤都(91回生)はフルートで入団、現在中堅の団員となって活躍している。

平成1年入学・下諏訪の武井周一(95回生)はヴァイオリンで入団、現在コンサートマスターとして中堅の担い手となっている。平成2年入学・上諏訪の藤森有紀子(96回生)はオーボエで入団、現在中堅の団員となっている。

ざっと以上であるが、来年創立90年を迎える諏訪響は、実は精神文化の高揚を音楽に求めた清水ヶ丘の友の魂と意欲によって支えられてきたことが多いと改めて実感し、諏中・清陵高校の素晴らしさの片鱗をみなさんにお伝えする次第である。

関連した話題では、1995年清陵創立100周年の時は59回生の武井勇二が世話人となり、知己のいるドイツのバンベルグ交響楽団をカノラホールに呼び、名指揮者ホルスト・シュタインの指揮でベートーヴェンの「運命」を演奏した。これを担当した59回の仲間20余名が2001年にバンベルグに旅行し、中世の遺跡高台にある城址で、第1校歌の「それザクセンの～」を歌ったのが、いかにも清水ヶ丘の友たちという感じで懐かしい思い出となっている。この中にも同窓の諏訪響団員が何人もいた。



撮影/坂口清一

●武井勇二(59回生 下諏訪出身)

昭和31年3月、現セイコーエプソン入社。昭和36年4月、諏訪交響楽団入団。昭和39年1月、指揮者の小澤征爾と初対面。以来、交流を深め、平成4年には小澤征爾とともに「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」を立ち上げる。平成5年から、フェスティバル総合コーディネーターとなり、フェスティバルの企画と総合推進を担当。かたわら、現在、諏訪交響楽団会長を務め、ヴィオラを弾く。北欧音楽会すわ実行委員長。長野県文化振興事業団理事。これらの活動を評価され、平成23年6月9日、長野県知事表彰を受ける。

私の「清陵魂」

私は音楽の素養を身につける家庭に育ったわけではありませんが、諏訪響の練習を小学生の頃から覗く習慣がありました。決して演奏はうまいものではなかったですが、何か人間の精神を高揚させる大変重要なことがここに起こっていると、子どもながらに直感し、毎回春と秋の定期公演は上諏訪の関ホールへ通っていました。

何時か自分もここに入って演奏しようと思う気持ちが芽生え、20歳で諏訪響の先輩からヴァイオリンを習い始めました。私なりに熱心に稽古し、23歳の時に憧れの諏訪響に入団しました。

その後、25歳で小澤征爾に出会うなど、数々の音楽家と交流し、音楽の素晴らしさを体験していきました。

気がついていたら今、小澤征爾と協働するなどフェスティバル総合コーディネーターという音楽祭推進の専門家になっていました。今、ヴィオラを弾いていますが、これはあくまでも諏訪響と同じ様にアマチュアです。ただ私は持ち前の清陵魂で、相手が小澤征爾であろうと誰であろうと、果敢に当たっていく心臓、あつかましさ、現在の私にしてくれたのだと思っています。

特集
2

東京清陵会ワーキンググループの活動

立ち上がれ! 中堅世代

2011年秋に、82回生、83回生、84回生の有志により、東京清陵会を活性化するためには中堅世代が立ち上がることが必要との認識のもと、『活性化ワーキンググループ(以下、WG)』を発足しました。ここでは、活性化WGの活動をレポートします。

学年幹事選出運動

WGでは同窓会活性化のカギのひとつは同期会の活性化であり、それには学年幹事のリーダーシップが必要と考えました。87回生以降の31学年のうち学年幹事の選出学年は7学年(23%)でした。総会参加者、前後学年など様々なルートで13学年の学年幹事を選出、現在は20学年(67%)まで選出し、あと11学年となりました。今、来年度で残り学年を選出、来年度は当番幹事82回生から117回生まで、全学年参加を果たしましょう。※学年幹事未選出学年は、89、90、97、100、102、104、105、106、107、109、112回生です。学年幹事を選出いただき、事務局にご連絡ください。

複数イベントの開催

従来、イベントは総会くらいでした。また、総会は金曜夜の開催ということで、参加するには限界があり、また時間の制約から内容も学生交流タイムが精一杯でした。そこで参加対象世代を明解にしたイベントを企画しました。平成24年から総会懇親会の中で、『学生社会人交流タイム』を開催、今年は3年目です。また昨年、『新卒歓迎・学生交流会』を開催しています。3月には初めての試みとしてパネルディスカッション兼ミドル交流会を開催(82回生が開催幹事)、

また昨年6月には新卒歓迎・学生交流会を開催しています(今年は83回生が主幹事、86回生が副幹事)。またイベント開催幹事を82回生以降が順次持ち回る体制で、当番幹事の前に学年の結束を強めるようにしました。

イベント開催幹事制度

開催幹事は当初ワーキンググループが担いましたが、当番幹事の近い学生が、学年の結束を高め、幹事トレーニングのため、今年からイベント毎に82回生以降が順次持ち回る体制にしました。今年は86回生までが開催に関わっています。

平成27年度のイベント予定

来年度も3月1日(日)に『ミドル交流会』、5月10日(日)に『新卒歓迎・学生交流会』、また『若手社会人・学生交流会』は、来年度は単独イベントとして11月29日(日)に開催予定です。会場は、いずれも総会と同じアルカディア市ヶ谷、時間帯は13:00~16:30、それぞれ開催2ヶ月前に東京清陵会ホームページに掲載予定です。ご期待ください。(詳細は13ページご参照)

総会が変わります!

2015年10月4日(日)12時からアルカディア市ヶ谷で開催します。日曜日午後開催の開催ですから、これまでの総会

のように平日夜は参加できないという方、お待ちしております。

また、これまでは金曜夜の開催ということで時間的な制約から、総会→懇親会のみの流れでしたが、12時~16時30分まで時間がありますので、新たに同窓生のパネルディスカッションを行います。詳細は「2015年度 東京清陵会総会のお知らせ」をご覧ください。

さらに、ご家族を同伴参加いただけます(家族割引を検討中)。

「東京清陵会だより」も変わります!

会報の企画として下記の事柄を考えています。

●特集『母校のいま』

母校創立120周年、付属中学開校で母校を知る特集を組みます

●『学生便りコーナー』

同期の会合開催報告や次回会合案内を掲載し、同期で集いやすくなります。またホームページとリンクして同期会案内できます。是非寄稿ください。

●『いろいろな清陵会紹介』

大学の清陵会、企業内清陵会など、いろいろな清陵会をご紹介します。寄稿をお待ちしています。

●『同好のページ』

同好の仲間を誌上でネットワーク化します。

■本部同窓会との連携企画をします!

本部同窓会、本部会報、記念品などで、連携企画を検討中です。

本部総会は、2015年6月27日(土)13時~、ホテル紅やを予定(詳しくは諏訪清陵同窓会ホームページご参照)。

(82回生 北原 譲)

来年度・2015年度 東京清陵会 総会・懇親会のお知らせ

日時：平成27年10月4日(日)
12:00~12:40 総会 13:00~16:30 パネルディスカッション+懇親会

会場：アルカディア市ヶ谷

●パネルディスカッションテーマ：『清陵からグローバルへ(仮題)』

●パネリスト：小林和男氏(62回生・ジャーナリスト、元NHK解説主幹)、藤森照信氏(68回生・東京大学名誉教授・建築家・建築史家)、伊藤洋一氏(71回生・三井住友トラスト基礎研究所主席研究員)を予定。

WG活動レポート

2014年度 新卒歓迎・学生交流会

～2014年6月11日 南青山会館～

今年の新卒者である117回生の歓迎会兼大学生OB(113～116回)を中心とした学生交流会を、6月22日(日)午後1時より、南青山会館で行いました。この企画は、2013年度に続き2回目となるもので、今年は83回生が幹事、86回生がサブ幹事ということで、企画・実施されました。

【講演会テーマ】

- 「心理学って何に使えるの？」
小口孝司氏(83回生)立教大学現代心理学部心理学科教授
- 「大学生にも知っておいて欲しいお金の話」
荒木健太郎氏(99回生)ソニー生命保険ライフプランナー
- 「女性が活躍する社会：医療およびマスコミ・メディア関係を中心に」
高木希奈さん(99回生)桶狭間病院藤田こころケアセンター勤務 精神科医

当日は小雨の生憎の天気でしたが、学生・先輩OBを含め約30人の参加者が集まり、当番幹事学年：83回生岡本徹の司会のもと、同じく83回生の森政宏の開会の挨拶で、会はスタートしました。その後、藤森宏一東京清陵会会長(63回生)の歓迎の辞に続き、『聞いて得する身近な情報を 清陵の先輩から』という今年の新企画として3人の先輩OBによる以下のリレー講演会が行われました。

いずれの講演も素晴らしく、楽しく、そしてまた「なるほど」と、とてもためになる内容で、参加してくれた学生さんのアンケートでも好評を頂いていました。

講師の皆様からは「お話を楽しんでいただけたなら、幸せです。大学生たちには今後折に触れて心理学を学んでいた

けたら、きっと役に立つことと思います。

30分ほどという短いので仕方ないですが、参加して下さった皆さん、それぞれの専門や経験から、テーマについて、ディスカッションができればさらに良かったのではないかと思います。

幹事の皆様お疲れさまでした(小口君)、「少しでも学生の皆さんのお役に立てたこと、同窓会発展のお手伝いが少しでも出来たこと、本当に光栄に思います。来年も機会があれば是非お話しさせてください(荒木君)、「このたびは、このような機会を与えてくださり、本当に感謝しております。他の講師の先生方のお話もとても有意義でしたし、私自身としてもとてもよい勉強になりました。私はあまり先輩方や学生さんにはタメになるよ

うなお話ができずに申し訳ございません。でも、清陵を愛する気持ちはみなさんにも負けていないと思いますので(笑)、また何かお手伝いすることがありましたらおっしゃってください。今後とも何卒よろしくお願い致します(高木さん)とそれぞれ感想を頂いています。

その後、コーヒープレイクを挟んで出席者各人の自己紹介、全体フリートーキング、学年別打合わせと進んだ後、平林千義副会長(67回生)による閉会の挨拶が述べられ、最後には出席者全員での記念撮影を行い、無事、予定どおり終了となりました。

今回の新卒歓迎・学生交流会は、正に会の名称どおり、参加してくれた学生会員からも好評を博すとともに、交流の場の一層の充実や、引き続き交流会に参加していきたい旨の声が聞かれ、小規模ながら若い会員の同窓会参加への契機の一つとなりうる半日でした。

参加してくれた新卒117回生、学年幹事の清水創君からは「今回新卒歓迎会に参加させていただいて感じたことは、やはり清陵独特の雰囲気にも溢れる場だと言うことです。先輩方からの講演も大学の講義より、ある種為になるものばかりでした。同じ場所で青春を過ごした様々な年齢の清陵生と触れ合うことで、卒業してもなお清陵に対する思いは膨れるばかりです。本当にいい機会になりました。ありがとうございました」とコメントもらっています。

このように若い世代の同窓生とも様々な「交流」が出来て、とても有意義な会合・時間であったことをご報告させていただきます。参加頂きました皆様はもちろんのこと、声掛けして下さった学年幹事の皆様、準備段階や当日の運営にご協力頂きました皆様に感謝しています。来年は84回生が当番幹事となりますが、今回の課題はやはり「参加者の募集」(開催の周知)だったと思われるので、更に有効で、緻密な連絡手段をとって、もっともっと多くの学生さんに参加してもらえる会になっていけば良いと思っています。

(83回生 岡本徹)



今年の新卒生(117回生)たち。

WG活動レポート

ミドル交流会 社会で活躍する 先輩の話を聞く会

～2014年3月8日 南青山会館～

同窓会イベントの中では、今までメリット感に乏しかった中堅世代の30～45歳の会員向け、社会で活躍する大先輩に話を伺って交流を深めようと、社会人ミドル層への訴求イベント。人間力養成、人脈形成等で同窓会参加のメリットを感じてもらおうと、初めての試みとして開催されました。

企業の経営者として大活躍をしている3人の大先輩を迎え、学生・先輩OBを含め約30人の参加者が集まりました。パネリストの方々の自己紹介に続いて、30代、40代、50代それぞれに応じた、戦略、戦術、戦闘のMPBの話、経営者になってから迎えた様々な局面で経営者

として、どう判断して、どう行動とったのか、また周りにどんな影響があったのか等を話していただいた。

主幹事は82回生、83、84回生がサポートし開催されました。



左から、両角さん、藤森会長、原さん、小口君。

【パネリスト】

原 大氏 (73回生・諏訪西中)

「事の成否ばかりを気にし、楽な道ばかりを選択することがないように」

●早稲田大学政治経済学部に進み、体育会・漕艇部に籍を置き4年生で主将に。昭和50年三和銀行入行、平成18年に三菱東京UFJ銀行常務取締役、代表取締役専務を経て平成22年に代表取締役副頭取に就任。平成24年に同行を退任し、現在は双日代表取締役副会長。

両角寛文氏 (78回生・諏訪中)

「一度しかない人生を悔いのないように」

●慶應義塾大学経済学部に進み、マンドリンクラブに籍を置く。昭和54年パイオニア入社、昭和62年に第二電電へ。平成12年に三社統合

でKDDIとなり、取締役経営管理部長。平成13年KDDI執行役員、平成19年取締役・執行役員専務を経て、平成22年同社代表取締役副社長に就任し現在に至る。

小口久雄氏 (81回生・岡谷北部中学)

「楽しい人生を過ごすために、自分が未来どうなったら楽しくなるのか強くイメージすること」

●中央大学理工学部 管理工学科に進み、ゲーセン、ビリヤード場に入り浸る。昭和59年株式会社セガに入社。平成15年株式会社セガ代表取締役社長、平成20年セガサミーホールディングス株式会社取締役兼チーフクリエイティブオフィサー、平成20年サミー株式会社取締役、代表取締役副社長を経て、現在はセガサミークリエーション株式会社代表取締役社長。

特別寄稿

頑張る中堅OB 「病気を力に変える！」

86回生 大久保淳一

「進行ガンと難病を患い生存率20%の闘病を乗り越えた大久保さん。100km マラソンに復帰——社会を勇気づけるニュースとして、この1年、様々なメディアが使ったフレーズだ。

1999年、私は取引先の役員に誘われ、フルマラソンを始めた。清陵陸上部の時、膝の故障から医師に走ることを禁止されて以来だった。そして、これが縁で、再びランニングの世界に戻る。年に4回もフルマラソンを走り、遂に100km マラソンを走るまでになっていく。

しかし8年後。仕事も、家庭も、マラソンも充実していた時に、突然、告げられたガン。腹部、肺、首にまで転移し、ガン最終ステージにまで進行。医師はあらゆる治療を施し、私の命を繋ごうとした。だが悪いことに、難病である肺線維症をも発症してしまった。5年生存率2割の命と向き合う日々が始まった。10カ月の入院、献身的な医師達の治療により、奇跡的に一命を取り留めた。

確かに命は助かったが、手術と抗癌剤治療を繰り返した私は、衰弱し、横断歩道を渡れぬ程傷む。一度衰えた身体は、容易には戻らない。ここから手探りの社会復帰を試みる。退院半年後、週に2日、4時間だけの出社を開始。2年後、1周500mの公園を歩け

るまでになる。

治療により、肺機能の1/3を失い、いくつか臓器も無い。「普通の生活に戻ることを考えましょう。マラソン復帰など、有り得ない」。主治医の言葉だった。しかし、生かされた者として、チャンスを活かしたかった。100km マラソンへの復帰を諦めることは出来なかった。

リハビリにリハビリを重ね、昨年6月、7年ぶりに100km マラソンのスタートラインに戻ることができた。大会当日、清陵時代の同窓生たちがフェイスブックを通じ熱く応援してくれた。30年間音信不通の私を、再び母校と繋いでくれた。私は、様々な方の助けのもと、社会復帰を果たし、再び100kmを完走するまでになった。

来年は、是が非でも病気前の自己記録を更新し、癌を患っても、人生にまだチャンスがあると証明し続けたい。



大久保淳一 (86回生)

1964年、茅野市生まれ。名古屋大学・大学院修了後、国内メーカーに入社。1999年、シカゴ大学MBA卒。1999年、米国ゴールドマン・サックス入社。2007年に精巣がんを発症し、抗癌剤副作用から難病・肺線維症をも発病。その後、奇跡的な回復を遂げ、復職し、2014年まで同社に勤務。現在、執筆、及び患者支援活動に従事する傍ら、東京大学医学部教員も務める。フルマラソンは50回以上、サロマ湖100km マラソンを6回完走。現在、夫人と二人の子供と暮らす。

報告

2013年度総会懇親会
「交流タイム」

成功裡に終わった前年と同じく、懇親会場に設けた4つの円卓に、社会人会員15名を職種別に配して学生会員との交流を図った。116回生の大学1年生から110回生まで21名の学生に対するは、昨年の2名から6名に増えた女性会員をはじめ、社会や企業の中堅として活躍する清陵卒業生。経験を引き合いに出しつつ学生の質問に答えて「有意義な話が聞けた」と好評。世代を隔てた会員同士の交流を温める機会が今後増えることが期待される。

(84回生 赤羽俊昭)

同窓会活動に
学生として参加して

昨年から同窓会活動に参加しています。新歓、交流タイムを通して、多くの同窓生の方とお話する機会があり、皆清陵生だなーと懐かしく感じます。特に自分は今年就職活動がありましたので、様々な業界、また生き方のお話等非常に影響を受けました。欲を言えばもっと理系職の方が増えたらいいなあと思います。学生のうちは会費も無料であるため、もっと多くの学生を集め、若者らしさを吹き込めるよう頑張りたいです。

(114回生 大内春菜 岡谷東部中学校出身/東京大学工学部在学中)

学年幹事便り

▲清陵を卒業して初めて出席した東京清陵会で、たまたま幹事を仰せつかったものの、何もしないままに20年以上が経過してしまいました。これはやばい。自分のオリジンは諏訪にありと痛感することが多い昨今、20数年前の出会いに感謝し、故郷を想い、お返ししていかねばとの心境です。総会への参加、よろしく願います。(91回生学年幹事 藤森裕司)

▲上諏訪駅を降り清陵へ向かって歩く20号線沿い、諏訪二丁目の交差点を過ぎて左手にある「酒ぬのや本金酒造」。この酒造元を取り仕切る9代目蔵本兼杜氏は、

101回生の宮坂恒太郎くん。「人を幸せにするためのお酒を造ることが目標」。主張しすぎず飲みやすい本金の味は、口に含むと本人の柔らかい人柄を感じます。

東京でも東京駅構内のはせがわ酒店や、新橋駅前ビルの信州おさけ村で取扱あり。本金酒造のホームページ (<http://www.honkin.net>) から注文することもできます。僕も先日届いた「純米 雨あがりの空と」を堪能中！ これからの季節によく合う爽やかな味で、思わず杯が進んでしまう。皆さんも時には諏訪を思い出しながら諏訪のお酒、いかがですか？

(101回生学年幹事 岡 真也)

▲現在、自分は社会人2年目、清陵の同級生の中にも結婚をする友人が出始める、そんな年頃です。同期会ではそれぞれの仕事の話聞く機会が多くなったのですが、自分は、それぞれの仕事や生活の話がとても面白いと毎回感じます。

高校・大学時代は「自反而縮雖千萬人吾往矣」の精神で、自分の道を見つけることで精いっぱいだったのですが、自分以外の人も同じように「自反〜」の精神で生きてきていることを改めて実感しています。魅力的な人間である清陵の友人に負けぬように、今日も一層「自反而縮雖千萬人吾往矣」の精神で励もうと思う、そんな年頃です。

(111回生学年幹事 中村太軌)

▲来年度の当番幹事82回生です。母校は今年、附属中学が開校、来年は創立120周年を迎えるという節目の年に担当することになりました。82回生は10人の運営団を組成、一同張り切っています。よろしく願います。

(82回生学年幹事 北原 譲)

82回生ホームページ
<https://sites.google.com/site/suwaseiry082/>

新任常任幹事挨拶

▲この度、常任幹事に就任しました83回生の岡本徹です。出身は茅野北部中で、清陵時代は剣道部に所属し(現在も続けていて教士七段を頂いています)、学友会では副会長をやっていました。現在は

大田区で歯科医師として診療に従事しています。これまで以上に同窓会活動に力を注いで参りたいと思いますので、宜しくお願い致します。(83回生 岡本 徹)

▲細田明(86回生)です。岡谷市立西部中学校、バレー部。私の清陵時代は部活一色でした。ヤー公指導の下、極寒の中で早朝通学、雪降る中で階段サーキット、終わることの無いワンマン練習などに明け暮れました。スポーツ刈りで青のジャージ服を毎日着込んで通学するダサイ学生でした。牛正坂記念碑建立時には諏訪湖マラソントップ通過ランナーとして除幕できたことは人生で忘れられない思い出です。現在は日系企業のための国際税務、財務を強みとする経営コンサルティング事務所を運営しています。常任幹事として、86回生の良き仲間と先輩、後輩を結びつける「くさび」の役割を果たしていきたいと思っています。

(86回生 細田明)

▲はじめまして、99回生荒木健太郎です。この度、東京清陵会常任幹事に就任いたしました。高校時代の思い出を挙げれば切りがありませんが、特に地方会や学友会など清陵独特の文化にどっぷりつかったことは今でも鮮明に覚えています。そんな大好きな清陵の同窓会に幹事として関わること、とても光栄です。同窓会懇親会では、みんなで校歌を歌い、巨大民を成功させましょう。

(99回生 荒木健太郎)

▲この度は東京清陵会の常任幹事に、ご推薦頂き有難う御座います。103回生の高林祐介と申します。岡谷西部中出身。清陵へは岡谷川岸から雪の日も自転車通学。端艇部に所属し、月曜一時限目の授業から寝てしまうほど、ボート漬の毎日で、全国各地への遠征等、懐かしい思い出です。その後、早大卒、金融機関で働き、休日は2人の息子と遊ぶのが最近の楽しみです。清陵会では諸先輩方の背中を頼りに、少しでも各行事のお手伝い出来れば、と思います。宜しくお願い致します。(103回生 高林祐介)

拝見! 学年会活動

特別企画

古希を越えて

東京ザザムシ会(64回生の皆さん)

特集第3弾は、活発に繰り広げられている、学年会の活動を拝見する特別企画。毎月第3水曜日に池袋の居酒屋で開催される「粋酔会」のメンバー有志とお話を伺った。8月初旬の時節柄、ビールで乾杯してからの取材となり、わいわいがやがや。大いに盛り上がったものの、話は右に左に、上に下へと多岐にわたった。はたしてどこまで正確に紹介できるか不安だが、64回生の学年会を紹介させていただく。

「高校を卒業してしばらくのことだったと思います。同期会に愛称をつけようということになりまして、誰だったか、ザザムシがいいんじゃないかと。ザザムシとはカワゲラ・トビゲラなどの水生幼虫で、伊那のほうでは甘露煮を食べますよね。諏訪地域では食べないじゃないかと一部異論もあったのですが、大多数の賛成ですんなり決まりました」と笑顔で説明してくれたのは、「東京ザザムシ会」で幹事を務める祖父江宏三さん。

昭和33年清陵入学組の64回生は、「33」と「64」のごろ合わせから「ザザムシ」と同期会を命名。祖父江さんは「暇人が多いのか、ボランティア精神に富んだ仲間が目立つのか、比較的まとまりよく集まっています」と続けた。

「ザザムシ」の中で特に意気軒昂な面々は、毎月第3水曜日に東京・池袋の居酒屋「粋酔(すいすい)」に集う。こちらの会は、名づけて、「粋酔会」といい、清水治弘さんが会長として音頭をとる。

「粋酔会」では、「酒は生涯の友、カラオケは人生の潤滑油」とばかりに飲めや歌えて若返りをはかるのはもちろんだが、その前段に約2時間の「懇話会」を開く。毎回、誰かが講師となり、趣味のこと、仕事のこと、時の話題などについて資料やスライドを用意して講義。ためになる話題あり、抱腹絶倒の話ありで、その後はフリートークで議論百出。

演題の一部を紹介すると、「似顔絵の

描き方」「良い写真とは」「広告業界も大変です」「時刻と時計」「エネルギーの今と将来」「東京の街歩き」など多彩。懇話会は2010年1月から続いていて、北海道や神戸、時にはマレーシアやオランダなど海外組同期生も参加する。

「ザザムシ会」の皆さんの活動が活性化する発火点は、同期の菊池千明さんが経営していた東京・東中野にあった居酒屋「わらじや」だったという。

「ゴージャスな戯曲『どん底』を連想させるような」味のある場所で、いつしか溜まり場に。55歳を迎えた当番幹事の時、再会した十数人が旧交を温めて定期的に杯を傾けるようになり、「ただ飲んでばかりいないで、何かアカデミックなことでもやろうや」と意気投合、始まったのが「懇話会」というわけだ。

皆が人生のひと仕事を終え、勤め人はある程度の地位となり、転勤もなくなったことで、それぞれが自分を見つめ直す時間と場所を求めていたのだという。

「東京ザザムシ会」の活動は、「粋酔会」をステップにさらに広がっていった。赤羽正行さんを責任者に年1回、油絵、水彩、似顔絵、写真、書、焼き物、詩など各人が得意とする作品を展示する文化祭も開いている。7回目となる今年は10月5日から10日まで江東区豊洲文化センターで開催する。会場近くの赤羽さん宅では、山形県出身の妻が腕をふるう、いも煮に舌鼓を打つのが恒例となっている。

6年ほど前からは海外旅行組も出現した。参加者は毎回、夫婦参加も含めて20名程。これまでオーストラリア、マレーシア、タイ、インドネシアなどを訪問、ベトナム・カンボジアを訪れた際には井戸を寄付して、表彰も受けた。



花岡忠史さんを中心とした山歩きチームが誕生したのは、2年前。奥多摩や秩父を活動の拠点として自然と親しむ。諏訪にも足を伸ばし、入笠山、天狗岳も制覇した。そのほか、年1回の国内旅行、年2回春・秋に山中湖で開くゴルフコンペ、女性たちだけの女子部の活動も活発だ。

なぜ、これほどまでにまとまりがよく、衰えを知らぬ活動ができるのだろうか。

実は、ザザムシ会は、2012年の「古稀記念誌」の編集をきっかけに、連絡網ならぬメール網を作った。記念誌を編集した垣内直さんは、「さまざまな情報を共有することで、皆の距離が近くなり、活動の場が広がっていった」と言う。

まとまりが良い理由について、清水さんは「人生さまざま経験して、それぞれに考え方は違うが、お互い、どこか尊敬できる部分があるなど、皆が思っているからかな」と言い、祖父江さんは「高校時代には知り合えなかった同窓生と、新たに知りあう楽しさがある。様々理由がありますが、結局、みな群れるのが好きなだけかもしれませんね」と笑った。

64回生は、人生を粋に酔いながら楽しむ術を知っていらっしやると感じた。

(取材・構成/矢崎公二)



会費改訂ならびに賛助金納入のお願い 魅力ある東京清陵会へ

会員の皆様には、日頃から東京清陵会の活動にご支援ご協力を頂きお礼申し上げます。さて、今年度から会費と納入方法が改訂されました。これまでの経緯について説明し、皆様のご理解ご協力を頂きますようお願いいたします。

東京清陵会は、永きにわたり、常に財政問題を抱えておりました。同窓会本部が、毎年母校が新入生から徴収する同窓会入会金と終身会費を合わせた二万円を基に活動し、卒業生からは会費を徴収していないのに対し、東京清陵会は、皆様から納入していただく会費ならびに賛助金で活動・運営しております。

終身会員制度の廃止と 免除会員の見直し

昨年(2013年10月18日)の定時総会において、会費および免除会員制度の改訂が承認されました。これに先立つ2012年度総会では、終身会員制度について、終身会員の新たな募集を中断してから10年経過した2014年3月末日をもって廃止することも承認されておりました。これにより今年度から「新会費」を終身会員と免除会員の皆さんにも納入をお願いすることになりました。

1992年4月から財政基盤のより安定を目指し導入した終身会員制度(いち度1万円を納入すれば終生会費を納める必要がない)は、発足当時の金利6~7%を基にすれば、終身会費1万円でその当時の年会費600円に相当する利息が毎年入り、会費と合わせて運営費用を賄える仕組みになっておりましたが、その後、ゼロ金利に近い超低金利の時代が続きこの仕組みが成り立たなくなり2003年からあらたな終身会員の募集を中断しておりました。

終身会員の皆さん 有難うございました

終身会員制度は、新たな募集を中断した2003年までの間に1,230名(別冊子「会費納入のお知らせ」に氏名掲載)の方の終身会費納入があり、東京清陵会の財政基盤安定に向け貢献をしていただきました。本当に有難うございました。

その後も、会費未納の会員が多くおられたことと超低金利とで財政は慢性的に赤字が続き、過去の繰越金を取り崩して凌いでおりましたが、1998年以降毎年150万円程度の取り崩しが続き、ピーク時1,600万円余あった繰越金も2005年には600万円余となり、このままでは何れ繰越金が底をつき、会の運営にも支障をきたす危機的状態が予見されたため、皆様のご賛同を得て2005年度から賛助金制度を導入実施することにしました。終身会員、免除会員、会費完納会員の皆様にも、会費相当額を目標としながらも、一口1,000円で、何口でも、会計期間中何回でも、可能な範囲での賛助金の納入をお願いするものでした。

皆様のご理解となによりも清陵に寄せる熱い思いとご好意により、毎年賛助金納入額が会費納入額を上回って、辛うじて年間の収支バランスを維持することができましたが、賛助金に頼る不健全な状況を改善するに至りませんでした。

このような背景と年々会費および賛助金の納入額が減少傾向にあることと納入方法が複雑(3年間で一会計期)であったため、総会でご承認いただき改訂に至ったものです。

今年度より 会費納入については 次のようになります

- 会費：年額2,000円を毎年お支払いいただきます
- 会費を免除する会員：満80歳以上の会員と満25歳以下の会員

賛助金については、従来どおり会費相当額を目安に、引き続いて会員ならびに免除会員の皆さんにもご協力を頂きたくお願い申し上げます。

会長 藤森宏一(63回生)

魅力ある東京清陵会へ

財政均衡を目指し、収入増のための新規会員勧誘、経費の効率的な使用に努力するとともに、東京清陵会をより魅力ある会にするため、総会・懇親会、清陵勉強会、ゴルフ会など多様な親睦・交流行事の充実を図って参ります。82回生を中心とした「東京清陵会を活性化するワーキンググループ(以下WG)」が2年前より活動しており、一昨年の総会の懇親会から始まった、「学生社会人交流タイム」、昨年からは「新卒歓迎・学生交流会」を、今年からは「ミドル交流会」をすでに実施しておりますが、このほかより多くの階層の皆さんが参加できる行事も企画検討中です。

定期総会についても、来年度は高齢の先輩会員や女性会員が、また平日夜間では時間的制約のある現役会員が出席しやすいように休日の10月4日(日)昼間に開催することにいたしました。来年の当番幹事82回生が実施内容について工夫を凝らし準備を始めております。WGの活躍により、今まで少なかった現役学生や若手同窓生が、総会や交流会行事に参加するようになり、face to faceによる交流の良さが再認識されてきました。

これらの活動の継続を通じ、東京清陵会は諸々の行事が、幅広い年齢層の交流の場所となることを目指します。

また、ホームページとお手元にお届けしている「東京清陵会だより」の一層の充実を図り、多方面で活躍中の会員の活動情報なども発信してまいります。

会費ならびに賛助金の 納入にご協力下さい

お支払いいただいた会費および賛助金でこれらの運営費用を賄っていることをご理解いただき、東京清陵会活性化のためにも、会費ならびに賛助金の納入のご協力をお願い申し上げます。

2014年度 同窓会定期総会報告

6月28日(土)、ホテル紅やにて定期総会が開催された。

2013度の会務報告、決算報告および監査報告の承認、2014年度事業計画および予算の承認、来年迎える創立120周年の記念事業に関する報告(名簿発行、記念講演会、ビデオ制作等)が行われた。

役員改選では、新会長に矢崎和広氏(茅野支部・68回生)が、6年の任期を務めた松下勲氏(上伊那支部・59回生)の後任として就任。矢崎新会長は2012年から母校創立120周年記念事業の担当常任幹事も務める。副会長は太田龍朗氏(東海支部・61回生)、山崎見氏(諏訪支部・64回生)が新たに就任、小川勝嗣氏(東京支部・59回生)、高見澤忠明氏(北信支部61回生)、小口啓子氏(岡谷支部・72回生)は再任となった。監事2名は再任。

さらに会長委嘱として、顧問に山崎壮一氏(51回生)、常任幹事に今井正喜氏(58回生)、事務局長に矢澤博氏(69回生)が新たに就かれた。

会の最後に、今年4月からスタートした諏訪清陵高校附属中学校についての説明が佐倉俊副校長からあり、80名の中学生は元気溘刺と意欲的に学習に取り組んでいるとの報告があった。

2013年度 東京清陵会定期総会報告

第47回東京清陵会定期総会・懇親会は、2013年10月18日(金)、例年通りアルカディア市ヶ谷で開催された。当番幹事は、80回生。

午後5時より「飛鳥の間」で行われた



定期総会は、2012年度の会務報告、会計報告、監査報告、さらに2013年度の事業計画、予算案、会費改訂などの議題を審議し、無事終了した。

続いて午後6時より「富士の間」で行われた懇親会は、来賓2名を含む参加者211名と、現役大学生への呼び込み強化や、事務局・各学年幹事の方々の尽力によって、近年では最高の人数となった。

80回生を代表した矢島茂人、米澤あ子両名によるダブル司会で始まった懇親会は、藤森宏一会長のあいさつで開幕。諏訪から駆け付けた来賓の松下勲同窓会長と佐藤尚登校長のごあいさつの後、恒例の鏡割り、参加者最年長である46回生増澤喜美夫さんの乾杯で懇親会はスタートした。旧友との久しぶりの邂逅に、話も弾み、美酒を酌み交わす参加者の方々。

そんな中、昨年、ワーキング・グループの提案で始まった、現役大学生と社会人の先輩による交流会をバージョンアップして実施。業種別に分けられた4つのテーブルでは、先輩が在籍する業界の普段聞けない話や就職などの話題に大学生が興味深く耳を傾け、時に質問する姿が見られた。

「♪東に高き八ヶ岳、西にはひたす諏訪の湖〜」。宴もたけなわの中、壇上が上がった当番幹事80回生の指揮のもと、日本一長い校歌を約12分にわたり会場

全員で謳いあげ、盛り上がりは最高潮。ともに清水ヶ丘に学んだ同窓生が、先輩、後輩、現役、男女の隔てなく、まさに「清陵の魂」が1つになった瞬間だった。

懇親会の締めは、来年度の当番幹事を担う81回生の安川昌昭さんの決意表明、田中達也さんの万歳三唱、そして1年後の再会を約束して閉会した。懇親会閉会后、なごりを惜しむ有志が、市ヶ谷駅前の公園で「金色の民」を挙行。訝しげに通り過ぎていく通行人を尻目に、もう一つの幕が閉じられた。「フレー、フレー！清陵！」(80回生代表幹事・脇坂守一)

東京清陵会の現況

データベースから東京清陵会の現勢を見ると次のとおりである(2014年7月31日現在)。

1. 東京清陵会会員の定義

(1) 首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城、群馬、栃木)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。

(2) 転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

2. 会員現勢 総数3,372名(住所不明者1,113名を除く)

(1) 都県別会員数

東京都1,579名、神奈川県692名、千葉県417名、埼玉県419名、茨城県74名、群馬県23名、栃木県25名、その他143名

(2) 年次別会員数(別表1)

3. 会費納入状況(2011年4月~2014年3月会計期:2014年3月末現在)

(1) 納入者数 637名

(2) 年次別会費納入者数(別表1)

(3) 年度別納入額および人数(別表2)

「東京清陵会」 ゴルフ同好会



第22回ゴルフコンペのご案内

会員の交流・親睦を兼ねてゴルフコンペを下記の要項で開催します。同期生などお誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

●日時:10月22日(水) 9時10分集合 9時50分スタート

●場所:大厚木カントリークラブ 桜コース

(東名高速道路:厚木ICから約13km、圏央道:圏央厚木ICから約10km、小田急:本厚木駅北口から送迎バス有り)

●プレー代:14,360円(食事付) 会費:5,000円

参加希望の方は、☎03-3518-2385 スタジオパラム=清水(84回生)まで。FAXの場合は、住所・氏名・卒業回・連絡先を明記の上、お申し込みください(FAX:03-3518-2386)。

●幹事=藤森宏一(63回生)、小海健治(84回生)

今年6月6日に若洲ゴルフリンクスで行われた第21回ゴルフコンペ。15名が参加、優勝は青木基浩さん(82回生)。



別表1 年次別会員数と会費納入結果(2014年7月31日現在)

回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費	回生	現員	不明	計	会費
~32	3	16	19	0	56	98	7	105	71	77	65	16	81	39	98	12	26	38	1
33	1	3	4	0	57	101	11	112	73	78	71	29	100	24	99	5	11	16	1
34	1	1	2	0	58	85	10	95	59	79	76	5	81	46	100	7	17	24	0
35	4	2	6	1	59	94	9	103	106	80	82	3	85	30	101	1	13	14	0
36	1	5	6	0	60	97	17	114	111	81	75	12	87	18	102		5	5	0
37	5	3	8	1	61	83	13	96	76	82	51	23	74	16	103	2	5	7	0
38	6	3	9	2	62	101	7	108	89	83	71	32	103	36	104	1		1	0
39	9	3	12	1	63	95	12	107	112	84	50	25	75	16	105				0
40	5	4	9	4	64	79	14	93	78	85	51	41	92	15	106	3	4	7	0
41	16	5	21	4	65	80	12	92	63	86	45	35	80	6	107	1		1	0
42	18	3	21	5	66	76	19	95	62	87	40	24	64	4	108	3	10	13	0
43	21	2	23	5	67	94	17	111	68	88	30	46	76	11	109		8	8	0
44	26	7	33	4	68	77	21	98	59	89	44	46	90	9	110	6	9	15	0
45	26	3	29	7	69	105	15	120	87	90	41	27	68	5	111	4	2	6	0
46	31	9	40	12	70	89	23	112	54	91	26	36	62	2	112	2		2	0
47	35	6	41	9	71	79	22	101	36	92	27	42	69	7	113	13	1	14	0
48	48	9	57	25	72	58	13	71	37	93	20	28	48	1	114	4	1	5	0
49	63	7	70	29	73	81	12	93	43	94	26	17	43	0	115	7	1	8	0
50	65	9	74	27	74	73	22	95	36	95	17	26	43	0	116	13		13	1
51	82	16	98	59	75	54	20	74	17	96	20	32	52	2	117	4		4	0
52・55	113	7	120	70	76	62	17	79	28	97	16	19	35	1	合計	3,372	1,113	4,485	1,921

- 注 1) 現員:東京清陵会に登録されている会員で、現在住所が把握できている方
 2) 不明:東京清陵会に登録されている会員で、現在住所が不明な方
 3) 会費:前会計期(2011.4~2014.3)会費完納者の人数(前納者含む)
 会費免除会員(2011年度時点で75歳以上、58回生以前)の人数1,003名
 (内終身会員 317名)
 4) 会費納入者数1,921名と前期納入者数の差は終身会費納入者、その他による。
 5) 終身会費納入者数 1,230名
 (内訳 現員:947名、死去:168名、所在不明:76名、退会他:39名)

別表2 年度別会費等納入額および納入者数

前々々々々々期納入額総計(1997.4~2002.3)	7,499,200円	1,371名
前々々々々々期納入額総計(2002.4~2005.3)	1,667,400円	541名
前々々々々々期納入額総計(2005.4~2008.3)	6,436,785円	1,167名
前々々々々々期納入額総計(2008.4~2011.3)	4,406,000円	812名
内訳	2008年4月~ 小計	1,960,000円 (456名)
	2009年4月~ 小計	1,334,000円 (364名)
	2010年4月~ 小計	1,112,000円 (290名)
前期納入額総計(2011.4~2014.3)	3,503,760円	637名
内訳	2011年4月~ 小計	1,578,630円 (403名)
	2012年4月~ 小計	996,130円 (239名)
	2013年4月~ 小計	929,000円 (234名)

注) 前々々々期、前々々々期および前期納入額には、賛助金も会費として処理されている。

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数(名)	不明者数(名)	次期繰越金(円)
1996	4,179	267	15,962,791
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881
2004	3,528	794	7,281,132
2005	3,410	894	6,192,586
2006	3,300	928	8,217,342
2007	4,000	698	8,385,652
2008	3,849	818	8,627,401
2009	3,822	813	9,108,456
2010	3,628	968	9,075,532
2011	3,595	960	8,543,349
2012	3,421	1,089	8,677,237
2013	3,363	1,123	8,165,247
2014	3,375	1,106	7,491,435

- 注 1) 次期繰越金は各年の3月現在
 2) 会員数、不明者数は各年の7月現在(2004年は5月現在)

収支計算書(案) 自2013年4月1日~至2014年3月31日 (単位:円)

収入の部

科目	予算額	決算額	差異 (予算の方が)
1 会費	3,340,000	2,443,000	897,000
(1) 会員年会費(64名)	600,000	183,000	417,000
(2) 総会会費(174+37名)	1,440,000	1,514,000	△ 74,000
(3) 賛助金会費(170名)	1,300,000	746,000	554,000
2 諸収入	121,200	123,374	△ 2,374
(1) 寄付金	50,000	50,000	0
(2) 預金利子	1,200	1,374	△ 174
(3) 会議費負担金	70,000	72,000	△ 2,000
当期収入合計(A)	3,461,200	2,566,374	894,826
前期繰越	8,165,247	8,165,247	0
収入合計(B)	11,626,447	10,731,621	894,826

支出の部

科目	予算額	決算額	差異
1 経費			
(1) 総会費用	1,440,000	1,310,340	129,660
(2) 会議費	250,000	292,504	△ 42,504
(3) 諸会費	70,000	79,500	△ 9,500
(4) 印刷・通信費	750,000	703,192	46,808
(5) 事務雑費	20,000	2,338	17,662
(6) 会報費	800,000	714,597	85,403
(7) 清陵勉強会	60,000	60,000	0
(8) HP運営費	300,000	77,715	222,285
(9) 予備費	10,000	0	10,000
当期支出合計(C)	3,700,000	3,240,186	459,814
当期収支差額(A)-(C)	△ 238,800	△ 673,812	435,012
次期繰越(B)-(C)	7,926,447	7,491,435	435,012

寄付金: 本部 40,000 学校: 10,000

2014年度収支予算(案) 自2014年4月1日~至2015年3月31日(単位:円)

支出の部

科目	金額
総会費用	1,400,000
会議費	180,000
諸会費	70,000
印刷・通信費	700,000
事務雑費	10,000
会報費	700,000
清陵勉強会	60,000
HP運営費	300,000
予備費	10,000
小計	3,430,000
次期繰越	7,512,635
合計	10,942,635

収入の部

科目	金額
総会会費	1,600,000
会員年会費	800,000
賛助金会費	1,000,000
寄付金	50,000
受取利息	1,200
小計	3,451,200
前期繰越	7,491,435
合計	10,942,635

(注) 2014年度予算収支差額は21,200円の余剰となります。

東京清陵会2013年度会務報告

2013

- 4・14 当番学年(80回生)第5回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 4・16 第139回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 齋藤寛(56)
- 4・18 第1回事務局会議(小林公認会計士事務所)
- 4・24 南信同窓連第47回親睦ゴルフ会(中山CC)
- 5・11 当番学年(80回生)第6回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 5・16 第1回臨時事務局会議(小林公認会計士事務所)会費について
- 5・18 南信同窓連定時総会(ホテルメトロポリタンエドモント)
- 5・25 本部同窓会常任幹事会・幹事会(清陵会館)
- 6・16 新卒生歓迎・学生交流会(南青山会館)、出席者42名
- 6・22 当番学年(80回生)第7回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 6・25 第140回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 竹内邦光(59)
- 6・29 清陵本部同窓会総会・懇親会(ホテル紅や)
- 7・6 東京同窓連平成25年度総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 7・20 当番学年(80回生)第8回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 7・25 常任幹事会(南青山会館)、出席者27名
- 8・1 若手幹事企画会議(小林公認会計士事務所)
- 8・24 当番学年(80回生)第9回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 8・24 第1回寒水会(伊藤長七研究会・現代教育観を読む会)
- 8・27 第141回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 小林正弥
- 8・29 学年幹事会(南青山会館)出席者49名

- 9・15 会報「東京清陵会だより」24号発行(発送部数3,363部)
- 9・25 当番学年(80回生)第10回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 10・12 当番学年(80回生)第11回進行会議/編集会議(小林公認会計士事務所)
- 10・18 第47回総会・懇親会(アルカディア市ヶ谷)出席者211名
- 10・20 第2回寒水会(伊藤長七研究会・現代教育観を読む会)
- 10・21 南信同窓連第48回親睦ゴルフ会(中山CC)
- 10・22 第142回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 赤羽根 巖(63)
- 10・24 東京清陵会第20回親睦ゴルフコンペ(若洲ゴルフリンクス)
- 11・4~5 南信同窓連親睦旅行会(伊香保)
- 11・9 本部物故会員同志社先輩の慰霊法要・常任幹事会
- 11・21 第2回事務局会議(小林公認会計士事務所)
- 12・6 南信同窓連忘年会(東京オペラシティ東天紅)
- 12・10 第143回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 五味敏雄(57)
- 12・23 第3回寒水会(伊藤長七研究会・現代教育観を読む会)

2014

- 2・1 東京同窓連新年懇親会(アルカディア市ヶ谷)
- 2・22 本部同窓会常任幹事会・幹事会(清陵会館)
- 2・25 第144回清陵勉強会(剛堂会館)・講師 宮坂寛(66)
- 3・1 第4回寒水会(伊藤長七研究会・現代教育観を読む会)
- 3・8 若手同窓生との交流会(南青山会館)(参加者38名)
- 3・17 東京同窓連第16回親睦ゴルフ会(川越カントリークラブ)

東京清陵会2014年度事業計画

- 1 第48回総会・懇親会の開催(10月17日・アルカディア市ヶ谷)
- 2 会報「東京清陵会だより」25号の発行(9月中旬)
- 3 常任幹事会、学年幹事会の開催(7月、8月・南青山会館)
- 4 当番学年(81回生)編集会議/進行会議(随時・小林公認会計士事務所)
- 5 事務局会議(定例・臨時・小林公認会計士事務所)
- 6 新卒者・学生交流会の開催
- 7 若手同窓生との交流会の開催
- 8 清陵勉強会(原則偶数月の第4火曜日・剛堂会館)
- 9 会員増強策の検討、実行
- 10 東京清陵会ホームページの管理
- 11 懇親ゴルフ会の開催
- 12 寒水会(伊藤長七研究会、小石川高校同窓会紫友会との共催)への参加
- 13 本部同窓会、南信同窓連、東京同窓連行事への参加
- 14 その他必要とする事業

編集後記

長いこと音信不通だった81回生。高校卒業以来、皆凸凹の日々を重ね、再会してみれば良き仲間。そのハーモニーを集結した2014年度の会報です。かつての国語の成績は??ですが、書くことを生業とするプロ達が大活躍しました。ご熟読下さい。
ご多忙の中、快く取材に応じていただ

た皆様、ご協力いただいた皆様へ、お礼申し上げます。ありがとうございました。
(81回生 矢崎理恵)

★81回生★
代表幹事：安川昌昭
会報編集：田中達也、山田 稔、矢崎公二

訃報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます(敬称略)。

氏名	年次	逝去年月日
中島 和希	(30回)	2013/8/5
田中 敏治	(32回)	2013/4/28
原 親夫	(35回)	2011/3/1
林 英之介	(38回)	2010/12/11
百瀬 興二	(38回)	1995/7/19
大宮 直治	(39回)	2013/1/24
小松 政重	(39回)	2012/7/16
細川 俊介	(39回)	2011/12/14
松木 駿	(39回)	2007/10/6
小口 芳保	(40回)	2011/10/20
小滝 寛長	(40回)	2013/8/31
林 武志	(40回)	2006/4/1
宮坂 光亮	(40回)	2013/1/19
清水 孝悦	(41回)	2014/1/27
武井 尚	(41回)	2012/3/31
千村 茂允	(41回)	2013/1/9
矢崎 正彦	(42回)	2013/4/4
宮坂 利二	(43回)	2012/12/31
芳澤 勇	(43回)	2013/4/2
鶴巻 弥三郎	(44回)	2013/1/4
小川 光男	(45回)	2012/10/16
五味 良秋	(45回)	2014/3/22
峯村 秀夫	(45回)	2013/12/3
村木 孝平	(45回)	2012/1/25
興石 吉寛	(46回)	2013/5/8
小松 五郎	(46回)	2013/11/19
齋藤 清一	(46回)	2013/1/7
倉島 武男	(47回)	2002/9/29
塩沢 活	(47回)	2011/11/1
下平 政信	(47回)	2013/8/22
矢島 廣人	(47回)	2013/6/30
向山 昇	(48回)	2013/9/4
小池 清一	(49回)	2008/2/17
田中 譲	(49回)	2007/4/24
山田 達男	(49回)	2008/9/22
坂本 健彦	(50回)	2013/9/20
矢崎 靖	(50回)	2013/11/25
大堀 京一	(51回)	2013/12/15
関口 昌弘	(51回)	2010/11/
松尾 芳樹	(51回)	2013/8/3
宮坂 幸人	(51回)	2010/1/18
渡会 信二	(51回)	2012/4/26
倉田 幹彦	(52回)	2013/11/27
関 喜光	(52回)	2011/2/19
中島 悌二	(56回)	2012/1/10
堀川 容平	(56回)	2013/6/4
榊原 清夫	(57回)	2012/5/9
小林 是之	(58回)	2013/2/15
武井 史雄	(58回)	2012/9/1
樋口 敏夫	(58回)	2013/12/18
宮坂 五三男	(58回)	2009/7/22
両角 正治	(58回)	2013/7/19
小林 光男	(61回)	2013/6/13
黒河内 谷明	(62回)	2007/4/
小池 清一	(62回)	2013/7/27
新保 正喜	(62回)	2012/1/18
伊藤 衛	(63回)	2004/1/
今井 公雄	(63回)	2010/2/
小林 勲	(63回)	2009/2/
伊藤 信行	(67回)	2013/5/20
浜 佳昇	(68回)	2010/7/1
牛山 正英	(71回)	2011/3/12
田崎 滋久	(74回)	2013/6/28
窪谷 文美	(75回)	2013/11/16
山田 雄三	(76回)	2014/4/4
藤森 智美	(93回)	2012/10/1
小口 絵理子	(96回)	2013/12/16

●事務局に連絡が入った方